
忍天狗【序部・第一部】

八尾メチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍天狗【序部・第一部】

【Nコード】

N0489T

【作者名】

八尾メチル

【あらすじ】

紅蓮に色づく紅葉の山奥、ひっそりと佇む旅亭に奉公に出た少女。そこからすべてが回り始めた。一人の忍びを中心に、明治末期、大正、そして昭和初期から太平洋戦争前夜までの半世紀、歴史の裏側を駆け、忍天狗しのびてんぐと呼ばれた一族の群像劇。

* シヤレにならん位登場人物が死にます

* 魔法妖術系はほぼ出てこないですが呪いみたいなのはあります

【序部・第一部】は主人公の少年期までのお話です

「1908 晩秋」

「1908 晩秋」

燃えるような紅葉とはよく言ったものである。

見事に色づいた葉はがくれやま隠山を麓から見上げ、娘は感嘆の声を上げた。汽車の車窓から見るあの山が近付くたびに、胸にある不安と期待のせめぎあいは大きくなっていった。山の美しさによるものだけでは勿論ない。

「もういいか」

呼びかかった声に返事をする、娘は車に乗り込んだ。運転席には白髪混じりの壮年の男が座っている。娘の父であった。彼は、葉隠山の麓の駅と山中の宿を往復する、送迎車の運転手を勤めている。紅葉も見慣れた景色であるが、娘は初めてこの山に登るのだ。

娘はここから離れた大きな街で生活していた。が、不況のあおりを受けて職を失う。娘はまだ若く、父も裕福とはいえない。働かねばならなかったが、いかにせん仕事がなかった。

そこで父の伝手で紹介を受けたのが、葉隠山の中腹にある、ある宿であった。

宿の名を朱雀亭すずくרתていという。秋色に染まる山が由来らしい。

車が坂道を登るにつれ、娘の心を不安がみるみる占めていった。遠くから山を眺めていたときにはあつた期待が、波のようにひいていったからだろう。紅葉は車窓からでは見えない。見えたとしても、先を急ぐ車からの景色は川のように流れていくばかりだ。やがて車は速度を落としていく。

娘は気付いた。眼前の山楓の木の狭間に、門があることに。「着いたぞ」

運転手である父はそう言ったが、娘には門以外、人が建てたものは見当たらなかった。不安に父を見つめるが、彼は急かすように顎

をしやくるだけだ。

「お迎えがきている」

そう言われて初めて、娘はその存在に気付いた。

いつからいたのか。木製の門は半開きになり、腰を屈めた着物姿の男が一人、立ち尽くしていた。あれが“お迎え”なのだろうか。父の方を見ると、彼は軽く頷いて応じた。

車から我が身と荷を降ろし、娘は父と相對する。父は、普段から無表情な顔をほんのわずか歪めた。別れを惜しむように。

「わしはこの先には行けぬ。朱雀の奥様には、よく言つてあるからな。失礼のないようにせいよ、こずえ」

父が何故こんな今生の別れのようなことを言つたのか、娘こずえには明らかではない。

だが父から離れ、案内人のあとについて門を潜つたその折に、たしかにもう引き返せぬ何かを思つたのだ。

案内人は兎丸銀二と名乗つた。

朱雀亭の下男下女を統括する役回りらしい。ひどく曲がつた腰の様から随分年寄りのように思えたが、顔の皺や黒々とした髪色からして、こずえの父より若いのだろう。銀二はひどく浮き足立つたような甲高い声で、朱雀亭にお勤めするものの心構えを説きながら進んでいた。

「いいですか、ここにお泊りになるお方々は並大抵ではございません。政府の関係者から、財閥のご重鎮まで。この国にとって大事な方々ばかりです。朱雀亭は江戸古来より、そういったお方々のお世話をしてきた宿なのです。そのところを心してお勤めなさい、よろしいかな」

炎の色の中をくぐり、こずえが行き着いたのはまた門であつた。今度は木々に隠れず、堀も見ることが出来る。銀二のあとに続いて門を潜ると、今度はすぐに屋敷があつた。山の中にこれほどの平地があるのかというほど広い敷地内にあつて、これもまた大きな平屋

である。

裏口より通された和室で、こずえは大女将と面会した。

目尻がつりあがった、きつい雰囲気の美女、というのが大女将の最初の印象である。この印象は中身からくるものであったらしく、こずえがお勤めを始めてからもずっと、大女将の下人に対する冷たく凜然とした態度は変わらなかつた。

朱雀亭は山宿であるものの、旅籠のように通りがかりの人々が気軽に一夜を明かせるような宿ではなく、どうにかしてあらかじめ予約を取った、それも身分のある人々が何らかの目的を持って泊まりに訪れるような宿であつた。数日、または数週間一度は立派な紳士服を召しまとつた壮年の男たちがこずえの父の車で朱雀亭を訪れ、離れて秘密の会合をし、飯を食い、翌日か翌々日には来た時と同じように帰っていつてしまう。少なくとも、彼らに温泉宿を楽しみに来た明るさはない。皆が皆唇を引き結び、緊張した面持ちで離れに案内されるのだ。

ここは普通の山宿ではない。

働き始めて一月で、こずえは違和感を抱いていた。

厳しい教育を受けた一月であつた。とりわけ、使用人が行き来して良い門や廊下は限られていた。

下女の先輩にミキという娘があつた。彼女は低い背に丸々とした体つきの明るい女で、一番新入りのこずえの世話を何かと焼きたがった。お喋りなミキは、こずえが聞かなくとも朱雀亭、ひいてはこの葉隠山についてを教えてくれたのだ。

ミキが言うに、葉隠山には天狗が住んでいるという。かなりの昔から、神社に祭られ、大切にされてきたのだという。

天狗を見た者もあるらしい。明治の世に入ってからほとんどそれもなくなくなったようだが、天狗は山で道に迷つた者や怪我をして動けなくなつた者を、ひそやかに麓まで連れて行ってくれる。祟るから祀ってきたわけではなく、天狗はこの山の神であるらしい。

朱雀亭の当主はその天狗神社の神主であるのだ。姓を焰村ほむら一族と

いった。焰村は士族でもある。その誇りが高いのであるう、泊まりに来る客に対してもへりくだったところは使用人には見せない。また客も客で、朱雀亭の大女将が己たちを迎えることを、恐縮しているようである。

こずえは天狗の存在を素直に信じたわけではなかったが、葉隠山がどこか神秘を帯びた山であるのは感じていた。朱雀亭にいても、明らかに使用人や家主一族以上の人の多さを感じることがある。この人氣が天狗のものならば、こずえはそれを敏感に感じ取っているに違いなかった。

焰村一族はこずえが知る限り四人であった。

まず大女将と、その旦那である朱雀亭の当主。この二人は使用人たちの前にもよく姿を現した。士族らしく、堂々とした立ち居振る舞いである。

そして、紅葉に透けるような美しさを持つ少女。この少女は兎丸銀二が敬語を使っていることから焰村の姓を持っているのだろうとこずえは推測した。使用人が上がれぬ屋敷の縁側に座しているところをよく見る。庭を掃く下人たちの様子を、睨むような目つきで眺めているのだ。

ミキが言うに、彼女は大女将の娘であるという。なるほど、美しいが厳しい顔つきはよく似ている。名は秋ノといった。しかし、こずえがこの少女と初めて言葉を交わすのはもつとあとの話であるから、秋ノの話は一旦ここまでにしておこう。

ところで、焰村一族の最後は男である。この男性は滅多に見ることがなく、外から彼が帰ってきたとき、こずえははじめお客さまだと思っただけで接待してしまっただけだ。立派な余所行きの着物を着ていた男は高笑いをし、名乗った。俺は焰村あさかけ旦影、焰村の家の子息であり、客ではないと。

謝罪して許しては貰ったが、旦影は陰湿な男であった。次代当主の顔を知らなかったことが、彼の一族としての誇りを傷つけたらしかった。そう、旦影はいずれ焰村当主に座す男であり、大女将の息

子である。彼が告げ口をしたのか知らないが、こずえが彼を客と勘違いした件は使用人全てにいつの間にか伝わっており、銀二にも叱られるわ、その上もつと肩身の狭い思いをさせられることとなった。何の悪戯心か、こずえはその次代当主の世話係りに回されたのである。

こずえのような下っ端の端女には過ぎた大役である。それも、ただお宿に来てまもない新参者が。

ミキにすら嫉妬されるようなこずえの日々が始まった。

「1908 冬より、1909 元旦まで」

「1908 冬より、1909 元旦まで」

あさかげ 旦影は陰険な男であった。だがそれは、こずえばかりに感じられるものではなかったらしい。

嫉みや妬みは勿論あったが、同情もあった。横暴ともいえる旦影のわがままに振り回されることを、旦影つきの下女は嫌というほど知っていたのだ。

旦影に偶然を装って茶をかけられることも、嫌味な言葉をかけられることも茶飯であった。そんなことは優しい方で、あるときなど洗濯物を干している時にかかわれ、追いかけているうちに池に突き落とされた。深い池ではなかったが、初冬ではあれど霜が降りるような朝である。三日三晩熱が下がらず、こずえは生まれて初めて死を感じた。

それにしても、とこずえは考え始めた。旦影は誰彼構わず乱暴に走るわけではない。旦影の奇行とまで言ってもおかしくない行動は、必ずある部屋の近くで取られるものなのだと、こずえは半ば確信していた。

その部屋は、数ある使用人が立ち入れぬ場所のひとつであったが、必ず廊下からも縁側からも襖が閉じられ、中が見えぬようになっていた部屋であった。この部屋が一体何のための部屋であるのかも、こずえには分からないが、一度だけ銀二が出入りしているところだけは見たことがある。だから絶対に部屋ではあるのだ。ただ何の部屋なのか、そしてその中にある何が旦影を奇行に走らせるのかは分からなかった。この部屋から遠いところでは、旦影の意地悪は鳴りを潜めるのである。

さて、紅の葉が散り落ち、冬が来たりて、使用人たちにそわそわするものが現れ始めた。

正月が近いのである。

ミキが言うに、この時期は宿も開くことはなく、数人を除く使用人は数日家を出されるのだという。その間朱雀亭は普段からひそやかな息遣いをより細める。噂によれば山神の祭事を年越しに行っているのやら、天狗を宿にお泊めしているのやららしいが、仔細を知る者はこずえの周りにはいなかった。ただでさえ、こずえは旦影の“お気に入り”として、下人仲間たちからは一線引かれているのである。長く雑談をしてくれる相手であるミキですら、ときどきは罰の悪そうな顔をして、仲間と呼ばれて行ってしまふ。こずえは徐々に孤立しつつあった。

「お仕着代じゃ」

住み込みの使用人ばかりだが、仕着代にしてはやや大目の金を貰い、みな数日朱雀亭を出ることになる。順番に銀二から金を手渡されていく列に並びながら、こずえは懐かしい父の顔を思い浮かべていた。数ヶ月にも満たないが、もう父と実家が恋しい。切れ切れする冬の寒さは、心にもしみこんでいるのだ。

ところが、銀二はこずえの番を飛ばして、次の番に金を渡しに行ってしまった。

目をぱちくりとする間もなく、皆に配り終えたと宣言し、銀二は奥に引っ込んでしまふ。こずえは慌ててそれを追った。

「出納役、わたくしはもううておりません」

銀二は顎の突き出た顔をしかめると、答えた。

「おまえには必要なかろう」

「どうしてですか、わたくしも、皆さんと同じように働いて参りました」

「ちがうちがう。おまえは、正月もこの家におるのじゃ」

意味を飲み込めぬこずえに業を煮やしたのか、銀二は苛苛と付け足した。

「わしだけで、焰村家の皆様のお世話をせいというのか。皆がおらぬ正月の間、おまえさんがそれを手伝うのじゃ」

「で、ではわたくしは正月もご奉仕で……？」

「さよう。名誉なことじゃと思えよ、今年はおぬし一人とわしだけじゃ」

それだけ言い置くと、銀二はさつさと奥へ行ってしまった。

銀二の宣言どおり、仕事納めを終えた勤め人達が徐々に帰省していく中で、こずえだけはただ、いつもと変わらず仕事をし続けた。

はがくれやま葉隠山は落葉につれ雪深くなり、やがて、正月を迎えた。

「そろそろ、おまえも知る頃合いじゃと思うてな」

凍りつくような寒い元旦の朝であった。銀二に連れられて行ったのは、件の部屋の襖の前であった。

「開けてみよ」

許しを得ても、こずえはためらう手を襖に添えられずにいた。業を煮やしたらしい銀二はさつさと襖を開けると、先に奥へと進んでしまつた。

「若様、あけましておめでとつございます」

「ああ、銀二か。おめでとつ、今年もよろしく頼むよ」

「ありがたいお言葉」

銀二は襖の内側で会話を交わしている。

誰かがいるのだ。

「新しい世話役を連れてまいりました。……これ、こずえ。早く入らぬか」

「は、はい」

銀二に呼ばれて立ち入った部屋には、布団が一つ敷かれていた。そこに上体だけを起こして佇んでいた者の姿に、こずえは息を呑んだ。

銀色の長い髪に透き通るような肌をした、美しい人間がそこにいた。雪のように真白な細い腕がこずえを呼ぶ。短い前髪の隙間から覗いた目は、ウサギのように真っ赤であった。

「こずえというのだね」

「は……」

「銀二から聞いてはいる。狗堂くわうどうの……幹久みきひさの娘だそうだが」

「は、はい、狗堂幹久が一人娘、狗堂こずえにございます」

「そんなに畏まらなくていいよ」

正座の膝に顔を隠すように身を縮めるこずえに、彼 声の調子からいつて男性だろう は明るく笑った。その声も、ぼそぼそと消え入りそうに聞き取りにくいものだったが。

「私は焰村ちかはの千晴。焰村ちかけ千影の長子だ」

千影とは朱雀亭当主の名だ。こずえは弾かれて顔を上げた。

「では、旦那さまの……」

「兄に当たるね。もっとも、向こうはそう思っているのかどうか疑問だが」

美しい顔に少しばかり苦い表情を浮かべて、千晴は言った。

途端、千晴が咳き込み始める。銀二は素早く立ち上がってその背をさすりながら、こずえを向いた。

「今日はこのあたりにしておこう。こずえ、おまえは正月いっぱい千晴さまのお世話をするのじゃ、よいな」

再びこずえが深々と頭を下げると、咳を収めた千晴はにこやかに言った。

「よろしく、こずえさん」

儂げな微笑みは、旦那影の意地悪いそれとは似ても似つかぬものだった。

千晴は病弱のため、あの一室でほとんど寝たきりの生活をしているようだった。

白子のあの容姿もあってか、床から上がっているときも部屋から出ることはほぼない。どうりで、使用人も彼の存在を知らないようだった。銀二から、千晴のことは誰にも言つたと固く口止めされているのもあるけれど。

しかし人らしくない焰村の家族のうちにあつて、千晴は自身の運命に対して淡白で、軽い男であった。使用人であるこずえと距離を

測るようなこともせず、まるで気安い友人のように接する。部屋から一步も出さず本ばかり読んでいるからか博識で、体力はないが非常に頭はよい。

弟の旦影の、千晴の部屋付近での奇行はますますひどく、こずえに對する仕打ちも増していったが、こずえは千晴に接するうちそれを理解した。彼は、兄が疎ましいのだ。

旦影が次代当主と定められているのは、千晴が既に先知れぬ身であるからだ。もし彼に健康な身体さえ与えられていれば、千晴が次代様だったに違いない。焰村の内事情の何一つ知らぬこずえすらそう思われるほど、千晴と旦影では人間性に明白な差があった。

年明けた三が日には、朱雀亭には意外ともいえるほど、たくさんの方が訪ねてきた。「外の様子を知らせてほしい」と言っていた千晴にそのことを伝えると、彼は納得したようにこう言った。

「親戚が来たんだよ。きみの言い様じゃ、それは白虎のじさまと、玄武のばさまかな」

「まあ、白虎とか玄武とか、このお屋敷は朱雀亭ですし、それじゃ青龍もおられるんですか」

「昔はいたが、今はいない」

千晴は意味深い言葉を吐き出した。

こずえはかねてからの疑問を、この優しく賢い男に尋ねてみることにした。

「千晴さま、この山……葉隠山には天狗様がおられるって話、ご存知ですか」

「天狗だって？」

千晴は赤い目を真ん丸にした。

「それ、誰に聞いたんだい」

おかしなことを訊いたと、急に恥ずかしくなって俯きながら、こずえは答えた。

「女中の仲間に聞きました。葉隠山は天狗の住む神聖な山で、朱雀亭のご当主は、天狗を祀る神社の神主でもあるのだと」

「うーん、間違ってもいないんだけどなあ」

「本当なんですか？」

驚いて口元を覆うと、千晴は答えづらそうに言葉を濁しながら続けた。

「天狗はいるよ、この山とこの屋敷に。けれどそれは、きみたちの思っているような“良い”天狗じゃない」

「では人の子を浚って食ってしまうような、恐ろしい魔物で？」

「そういうわけじゃないけど……」

千晴は漏れ聞こえるような微かな声を、さらに薄めて言葉を紡いだ。

「実はね、朱雀亭の一門は皆天狗なんだ」

こずえは目を瞪ると、すぐ眉根を寄せた。気の良いこの当主子息に、からかわれたと思ったからである。

しかし千晴は大真面目にかぶりを振った。

「本当の話さ。焰村一族はそれを束ねる、いわば天狗の頭領のような存在でね。ここでいう天狗ってのは別に、空を飛んだり山を吹き飛ばしたりするような、霊力の持った妖怪ではないのだよ。みんな人間さ。だけど、少しばかり回り合わせが普通と違っている一族なのだよ」

「ち、ち、千晴さま。子供だましのお戯れはおやめくださいませ」

「きみが信じようと信じまいと結構だ。けれどね、正月に集まる連中は、うちの一族の者たち、つまり普段は各地に散らばる天狗なさ。それが証拠に、関係のない使用人はみな暇を出されてるだろう、あれは天狗の話の聞かれないようにするためなんだ」

「では、何故わたくしはここでこうして、千晴さまのお世話仕っているのです？」

意地悪い気持ちでつんとこずえは言ったのだが、千晴はあっさりと答えた。

「きみも天狗の一員だからさ」

「へ？」

「考えてもごらんよ、きみはどうして奉公して数か月で、私のような一族の瘤みたいな男の世話をさせられていると思っっているんだい。きみの父上は狗堂幹久だろ、あれは、そりゃ立派な天狗だった」

「そんな馬鹿な」

「私が幼いころ、彼はよく天井裏から忍んでやってきて、山の草花とか栗や柿の実を持ってきてくれたよ。不憫なぼっちゃんだって言うてね」

「ああもう、失礼いたしますわ、千晴さま」

馬鹿な話に付き合っついていられなくなって、こずえは襖を閉めた。

旦影よりはマシだと思っっていたが、千晴さまもこんなに奇妙なお方だったなんて！

まあずつとあんな小部屋に閉じ込められて本ばかり読んでいたら、気もヘンになるに違いない。自分の一族を天狗だと思ひ込み、あまつさえいち運転手ですら天狗だなどと。だったらこのお屋敷にいる兎丸銀二も朱雀亭の当主も大女将も旦影も、みんな天狗ということになるのではないか。

千晴はその後も顔を見るたび天狗の話を持ち込んできたが、こずえは聞き流していた。

「頑固だねエ、こずえさんも」

「ああ、もう。千晴さまにこんな話を振るのではなかった」

こずえが天狗の話をも馬鹿らしく思っっていると気づいたらしい千晴は、一言だけこう言った。

「いつか必ず知ることになるさ。天狗が真に何者かってことをね」

そしてそれから、その話を振ることはしなくなった。まるでこずえに天狗を信じさせることを諦めたかのようだった。

「1909」

「1909」
正月が過ぎると、こずえは再び旦影あさかげのお世話役に戻されてしまっ
た。

とはいえ千晴ちはるの部屋への立ち入りを禁じられたわけではない。本
来彼の世話役である銀二も、千晴の待遇は不憫に思っているようで、
何度かこずえに話し相手を務めるよう命じてきたこともある。こず
えはこずえで、奇特な人だと思っではいるものの、旦影よりずっと
とつつきやすく、人柄の善良な千晴の世話をする方がありがたかつ
た。

季節は春が過ぎ、夏が訪れ、盆になった。その頃にようやく、こ
ずえは実家に帰ることを許されたのだった。

客の送迎役である父親とは、出迎えの際に顔を合わせることはあ
ったが、実家で一緒に飯を食うのはほとんど一年ぶりだ。母のない
こずえにとっては唯一の肉親である父だが、普段寡黙な彼は飯時に
こんな会話を振ってきた。

「おまえ、千晴さまとお会いしたのか」

「え……はい」

父、幹久の口から千晴の名が出たのは意外であったが、こずえは
すぐに「幼いころ天井裏から幹久はよく遊びに来てくれた」という
千晴の弁を思い出した。

「父さんが、天井裏から会いに来てくれたというお話を」

「千晴さまもよく覚えていらっしゃる」

幹久は感慨深そうに目元に皺を寄せる。無愛想な父の穏やかな表
情は珍しく、それがこずえの口をさらに軽くさせた。

「父さんが天狗だとも仰ってました」

「天狗？」

囲炉裏の向こうで、幹久は眉を上げる。こずえは笑みを曖昧に崩

した。

「朱雀亭の人は大体が天狗だとか……千晴さま、ずっとあの部屋でお過ごしでしょう。きっとそう思い込まれているんですよ、お気の毒に」

「千晴さまがそこまでご存じだとは」

「父さん？」

不審を覚えて問うように声をかけると、幹久は厳しい顔つきになった。

「おまえ、その話は余所で、他の誰にもしていないな」

「しませんよ！ 当主さまのご息の悪口みたいじゃないですか」

「自覚しているのなら、二度と言っな」

ぴしゃりと言われ、こずえは肩を竦める。幹久は表情を崩さぬまま続けた。

「おまえが役目に戻るとき、わしも朱雀亭に行こう。当主様とお話しせねばならぬことが出来た」

父が当主様と何を話したか、こずえには分からぬ。

けれども朱雀亭にこずえが戻り、その後まもなく、こずえは再び千晴のお世話役を仰せつかった。

涼しくなると千晴の病状は少しばかり落ち着き、自室から出て縁側に出る姿をしばしばこずえは目撃するようになった。外に出て咎められやしないかと恐々とするこずえに、千晴は晴れやかな笑顔でこう言ったものだった。

「こずえさんのおかげで、私の立場も随分いいものになった」

こずえは何もしていない。しかし、千晴は嬉しそうに言うのである。

「こずえさん、こずえさんさえ良ければ、私の傍にずっといてもらいたいな」

どういう意味なのか問うことすら出来なかったが、こずえは熱くなった頬を、千晴に見られぬよう両手で覆った。

実のところ、こずえは千晴のことを気に入っていた。多少言動がおかしいことさえ目を瞑れば、理不尽な暴力も身分差による圧力もない。千晴は風のような男で、掴みどころがなかった。とりわけ、旦影が襖の向こうで自分に対する暴言を放つのを聞いても、笑うのである。その柳のような強さに、憧れにも似た感情があつた。

こずえに縁談が来たのは、その矢先であつた。

持ち込んだのは銀二だった。どうやら、朱雀亭で働いている下男の一人であるらしい。こずえは顔も名前も知らなかった。朱雀亭は広いのだ。

「こずえさんが嫁いでも、今まで通り朱雀亭で奉公してもらつのは変わりません」

どうやら、差し金は大女将であるらしい。彼女はこずえが千晴と懇意にするのを好ましく思っていないのだ、ということとは、こずえにもうすすす勘付かれた。今までこずえは、こずえが千晴の世話をするように手を回していたのは大女将だと思つていたのだが、それは勘違いであつたらしい。銀二の独断であつたというのはその時聞いた。

そしてもう一つ、こずえは大きな勘違いをしていた。それは、朱雀亭の焰村ほむら一族に関する誤解である。

焰村の姓を持つ人物は朱雀亭に四人いる。当主と大女将、そしてその子である千晴と旦影である。つまり、あの美しい少女、秋ノは違つのだ。

それでは何者かというとなんと旦影の許嫁であるらしい。朱雀亭で、次の女将としての花嫁修業をしているのだそうだとて、そうは見えないが。

そしてこの夏、その結納がようやくと行われたそうだと。使用人の目にも触れぬほど、ひっそりと。秋ノは正式に旦影に輿入れした。

「次代様が結婚したってんで、私にお鉢が回ってきたということだよ」

寝ることしか仕事がないのにねえ、と千晴は呑気に縁側で欠伸し

ていた。

そう、今度は千晴の縁談が話題に上るようになったのだ。今まで五の歳まで、七、十歳まで生きられぬと散々言われて暮らしてきた白子の彼も、先日二十歳を迎えた。本来ならこのまま独り身でひっそりと死んでいくのが焰村家にとって盤石だったのだが、何故だか朱雀亭において千晴の発言力は日に日に増しつつあるらしい。

「ホラ、こずえさんに夏頃来た縁談。あれから話が進んでいないでしょ」

季節はうつろい、今は秋も深く、再び葉隠山は紅蓮に染まっっている。

千晴の言葉にそういえば、とこずえが虚空を見上げると、細長い腕がその肩を引き寄せた。

こずえは目を白黒させる。倒れこんだ先は、千晴の胸だった。

「それはね、私が止めさせたんだ。だってこずえさんがいなくなったら、誰が私の面倒を見てくれるのさ」

「そのために、奥様をお迎えになるんじゃないかなかったですか」

「ううん、こずえさんが私の奥さんになったら、一事が万事うまくいくじゃないか」

ぱつと白い男を引きはがし、こずえは彼を見上げた。

「その話、大女将にされたんですか」

「いや、まだ。だが当主にはしたよ。乗り気だったし、きみの父君にも上手く話してくださるそうだ」

「でも身分が違います」

「この明治の世に、きみは何を古臭いことを言うんだね」

「大女将が……」

「あの人は、私がいかにどこぞの位の高いご令嬢を嫁にもらわなかに苦心していたから、丁度いいんじゃないかな」

再びこずえを抱き寄せて、千晴はその耳元に囁いた。いつもの通り、蚊の鳴くような声音で。

「あとはきみさえ良ければいい」

「天狗を……見せてください」

これだけ骨と皮だけの身体のくせして、千晴の腕はびくともしない。

こずえが精一杯の抵抗としてそう言うと、千晴は少し困ったように眉をひそめた。

「参ったな」

「参ったなら離してください」

「きみは、何を証拠に私たちが天狗だと信じてくれるんだ？」

答えに窮するのはこずえの番だった。

何故だか悲しげな顔で、千晴は彼女を見下ろしている。

「知ればあなたは後悔するだろう、けれど恐らくいずれは知ることになる……それが答えではいけないか？」

「私は……私が嫁げば、父が独りになります」

「それも心配ないと思うがね……そのことが解決すれば、かまわな
いかい？」

「はい」

結局のところ、幹久は二つ返事で了承した。

「1914」

「1914」

こずえと千晴は人知れず夫婦となった。元々千晴の世話をするようになってから、こずえの身は銀二を除く他の使用人たちの目にはほとんど触れないようになっていたので、仔細を知る者はおそらくいない。お屋敷の最奥で、こずえは今まで通り、女中のように働き続けた。旦影たちのような華やかな結婚の儀も何もなく、ただ結納だけが行われたが、こずえはそれでも、幸せであった。

それから間もなく、こずえは子を授かった。娘であった。アカリと名付けられたその子は白子ではなく、明るく活発で、少しばかりおしゃまに、すくすくと成長している。

アカリが三つになったころ、突然の客が朱雀亭に訪れた。それも、通されたのはお屋敷の方。親族である。

「銀二さん、どちらさまで？」

忙しく用意をする銀二を捕まえて尋ねると、銀二はせむしの身を扱いつらそうに振り返り、答えた。

「一族の者じゃが、まいった。当主ご夫妻は次代様ご夫妻を連れて、白虎の村まで足を運んでおられて留守なのじゃ」

「それでは、千晴さまがお相手なさってはいかがですか？」

こずえの提案を、銀二は瞠目で受けた。

「それはならぬ」

「どうしてでしょう。大切なお客様をただお待たせするわけにはいかぬのでしょう」

子を産んだことで、こずえの言葉は徐々に、朱雀亭の中で力を持つようになっていた。

後継の立場から外されているとはいえ、千晴は焰村当主の長子なのだ。旦影夫妻に子はない。千晴の子が再び後継の座に上るのも不可能なことではないのだ。

銀二はそのことをよく知っている。声を一層ひそめて、こう応じた。

「白虎や玄武の使いなら、千晴さまでもよかるう。だが、今度の使いは青龍じゃ。いかん」

「青龍の方たちもおられたのですか」

結納の際、一族のうち“白虎”、“玄武”と呼ばれる者たちの代表の老人たちが来ていたが、青龍はいなかった。驚いて口に出すと銀二はしまった、と言わんばかりの顔になった。

そこに、こずえは食い下がる。

「教えてください、銀二さん。何故この家は朱雀で、他家も四神の名を持つのですか。そして、青龍の名前だけが正式な場にはないはどうしてなのですか」

「……この一族は代々天狗の身であつてな」

天狗、という単語にこずえは息を呑む。銀二は滔々と続けた。まるで開き直つたかのように。

「遠い昔、この国を支える天狗の力を授かったという伝承が残つておる……まるで御伽物のようじゃが、問題はその力が目に見える形で息づいているということじゃ。強すぎる天狗の力は四つに分けていつか完全にこの国の土に還すため、脈々と一族の中に受け継がれておる。その四つが、四神相応の名で呼ばれておるのじゃ」

「では、千晴さまも……」

「左様、朱雀一派の当主、焰村の名を持つものこそ力の一つ。白虎、玄武も同様じゃ。しかし青龍だけは……青龍の力は行方知らずとなつておる」

「力は受け継がれているものではないのですか？」

銀二はぎよろりと目の玉を動かした。

「目に見える形になつておると言つたらう。力はこつ……眼球ほどの大きさの、脈打つ黒い玉の形をしておるのじゃ。一度だけ、御当主に見せていただいたことがある」

なるほど、それで青龍の一族は、ほかの三つと並び立つ資格を失

ったのだ。

「でもどうして、青龍の力だけが行方知らずに？」

「それはわしも知らぬ。しかし、複雑な事情があつて、朱雀と青龍はあまり良い関係にはないのでな、なんでも明治維新の折にひと悶着あつたとか……とにかく、千晴さまの存在を青龍に知られたくないのじゃよ」

当主の子とはいえ、千晴はどちらともいえぬ鬼子の扱いなのだ。

「今日のところは、使いに帰ってもらう。おぬしも、このことは他言無用じゃ」

「銀二さん……千晴さまは、今のお話をご存じで？」

「無論。このお屋敷にあつては、知らぬはおぬしら使用人だけじゃ。去る銀二の背を見送つて、こずえは目をぱちくりとした。

どうして銀二はそのような言い方をしたのか？

使用人を除けば、この家は焰村家の者しかいないのである。

ほどなくして当主たちが戻つたが、再び青龍の使いが朱雀亭を訪れたのかどうかこずえには定かではない。

だがある晩、銀二が一家の臥所を訪ねてきて言った。

「今晚、このお部屋を出られることはないように」

千晴は厳しい顔つきだったが、頷いた。

ただならぬ重い空気に、こずえはアカリを抱いたまま尋ねる。

「どういうことですか。何があるんですか」

「おまえさまは知らなくてよろしい」

「またそんな……」

言い募ろうとしたこずえを、千晴が制した。

「一晩かぎりのことだ。……銀二、下がって良いよ」

その夜半のことである。

こずえは揺り動かされ、目を覚ました。

「かかさま、しっこ」

アカリの舌足らずな言葉に、こずえはひそかに起き上がった。

千晴は眠っている。ここから厠まではずぐだ。寸刻で戻ってこれよう……

アカリを抱き上げ、こずえは静かに襖を開けた。

いつもの通り、沈黙深い漆黒が　　いや。

こずえはその異質な気配に気づいた。元からこの屋敷には何かいるような感じが常にあるのだが、それはさらに輪をかけて、存在感と違和感を静かな庭に放っている。

早く済ませてしまおう　　アカリを抱く手に力を込めたとき、

それは突然、こずえの足元に降った。

縁側を見下ろしてこずえは叫びそうになった。

人の指だ。

頭上から滴る何か。それが血であることは疑いようがなく、こずえは梁の上にある“何か”が、庭先に立つのを見た。

風が走る。

また何かがこずえの肩を突き飛ばした。ぶつかったそれは庭に転落し、それをこずえが認識した矢先に姿を消す。ただ白い砂の上に黒い血だまりだけを残して。

何かが起こっている。どこからともなく吹く風と剣戟に、こずえはアカリを袂で隠した。恐ろしいそれからわが子を守らんと、ただ母親の本能だけがそうさせたのだ。アカリもまたこのこびりつくような異質な空気を吸い込んで、しゃくりあげ始める。

遂に、庭先にぼとぼと落ちる音がした。遠目からでもわかる。

あれは人間の破片だ。

悲鳴が上がる。こずえの上げたものではない。見れば、こずえのいる縁側の曲がり角に、髪をふり乱した女と、その背後に立つ影がある。奇声は女のものであった。

影は女を組み伏せたまま、佇んでいる。

こずえはアカリを抱きかかえたまま、寢所に駆け戻った。

数刻のち、夜明けと共に開けた襖の向こうには、いつもの通りの

朝が訪れていた。

庭先や縁側にあつた肉片や血は跡形もない。

間もなく夫も起きてきたが、こずえはその恐ろしい晩のことを話す気にはなれなかった。

しかし、その日仕事をしていたこずえの元に、意外な人物が現れる。

旦影である。

「外に出てはならんと、銀二に言われていたろう」

炊事をするこずえの後ろにひっそりと立ち、からかいような声音で旦影は言つ。

「恐ろしい目にあつたらうな」

どこまでも冷たい声に、こずえは心臓が凍りつきそうな心地だった。

土を踏む音がし、旦影が近づいてくる。

「……なんの、ことでしょうか」

「とぼけるな。昨晚、おまえたちの部屋の庭先であつた一件のこと、見ていないと言わさぬぞ」

「あれが何なのか、旦影さまはご存じなのですか」

はつと振り返ると、旦影は恐ろしい形相でこずえを見下ろしていた。

「あれがおまえの知りたがつていた、天狗の所業じゃ」

「天、狗様、が、人を……殺める、のですか」

うしろには窯がある。こずえは迫る旦影と火の狭間で身を縮めた。

「そうじゃ。葉隠山の忍天狗しのびてんぐは人を殺して飯を食らつておるからな」

「忍天狗……」

あつと、こずえは声を上げた。旦影がこずえの手首を捕えたからである。

「お放しく下さい！」

「馬鹿な女よ。何故干晴に嫁いだ？ 何も知らなければ、知らぬまま平穏な日々を送れたもの……わざわざ己から、天狗道へ墮ちる

とは」

顔を近付け、旦影は続けた。

「教えておいてやろう。昨晚のあれは青龍の使いじゃ。最近また生意気を言うようになってきておったからな、少々灸を据えてやったのよ」

ぱつと手を放すと、旦影は身を引いた。

「おまえも分相応に、慎ましやかに暮らすが良い。さもなければ、天狗の祟りに会うてもしらんぞ」

こずえは衿の合わせを掴んで息を整えながら、旦影が立ち去るのを待つ。

知ればあなたは後悔するだろう、だがいずれ知ることになる

千晴の言葉が浮かんで、消える。

焰村は天狗の一族なのだ。

千晴もそう。では、アカリもいずれそれに巻き込まれることになるのだろうか？

薄ら寒いものを覚えながら、こずえは立ち上がることができなかつた。

「1916 前」

「1916 前」

旦影あさかげが、朱雀亭当主を正式に襲名することになったと、年明け早々に聞かされた。

世襲の儀自体は春先にあるらしい。銀二によると、本来これは当代様がお隠れになるか、それも近い頃に行われるものらしいが、干影は健在である。

こずえは第二子を妊娠していた。一方で、旦影夫妻にまだ子はない。もし生まれ来るこの子が男児であれば、次代はこの子となる可能性が非常に高くなる。

そうなる前に、旦影を当代にしてしまおうという腹なのだ。

こずえは寧ろ、それを望んでいた。数年前までは白子とはいえ、旦影よりずっとまとまな神経をした千晴が後を継ぐべきだと思っていたが、あの恐ろしい一夜を体験してからは、全く考えが逆転していた。もし子供たちがあんな恐ろしい出来事の当事者となるようなことがあれば……こずえは未だ、忍天狗と呼ばれるこの一族の内実を知らない。殺人を犯して永らえる、この一族の呪いを知らない。知ってしまったえば、これ以上の深みにはまってしまうと思われたから、誰に問うこともせぬままに来た。

娘、アカリは五つになっていた。使用人の子と思しき、同年代の子供たちとよく遊んでいる。このまま健やかに育っていつてくれれば……その矢先に、大女将はこずえを呼び出して、こう言った。

「そろそろ、アカリさんはわたくしが引き取り、育てます」

呆氣にとられていたこずえは、我を取り戻すと大女将に迫った。

「あの子は私の子です。そんなことはさせません！」

「いいえ、こずえさん。あなたは知らないでしょうがね、これはしきたりなのです。焰村家にお勤めする以上、しきたりには従っていただきますよ」

「その前に、私はアカリの母でもあります。母として、理由も知らずにしきたりというだけで、娘を手放すことは出来ません！」

きつぱりと言いつけると、大女将は袂で口元を覆い、目を細めた。「では単刀直入に言います。今まで千晴さんはあなたに隠してきたようですが……焔村の、いえ、朱雀の家に生まれた子らはみな幼いころから訓練を受けるのです。一族が古くから守ってきたもののため」

「それは……」

旦那の言っていたことか。「葉隠山の忍天狗しのびてんぐは人を殺して飯を食らっておるからな」。

「あなたの父君はよく焔村に仕えてくれました。それに敬意を表して今までアカリさんはあなたの手元で育てさせていましたが、もういけません」

「その訓練が、もし、人を殺すための技術を含むなら……私は、アカリを連れてこの家を出ます」

「出て、どこに行くと言うの？ あなたの父君、幹久どのも朱雀天狗の一人。いえ、非常に優秀な天狗でおられるのに」

「父は……父は、しがない運転手です」

「あなたは何も知らずに育ったのですよ。幹久どのの懇願と、その働きあつてこそ」

こずえはひれ伏すように畳に額を擦りつけた。

「どうか……アカリだけはお許しください。アカリだけは……そんな、恐ろしいこと……」

「恐ろしくありません。これは非常に名誉なことよ、こずえさん。誤解しているようだけれど、忍天狗は殺人集団などではありません。古くからこの国の政を行う機関を支え、暗躍してきた一族なのですから」

こずえはようやく、朱雀亭を訪れる客たちが、何をしに来ているのかを悟った。

「中でも朱雀天狗、そして焔村家は他の三つ

白虎、玄武、青

龍の上に位置し、全てを束ねる忍天狗の長なのです」

こずえは熱弁を振るう大女将を見上げた。

この人は何を言っているのだろう。

「アカリさんもきつと、その礎になることでしょう」

「お願いです、お義母様……」

大女将はすつとこずえの正面に座すと、両の腕を取った。逃げられぬ体勢で、目を覗き込まれる。恐ろしく真つ直ぐな瞳だった。

「では選びなさい、こずえさん。アカリさんか、その、おなかの子か」

こずえは咄嗟に庇うように、自分の腹に手をやった。

大女将はこずえを見つめたまま、言った。

「期限は春、旦影さんが当代様になるまで。それと……」
ぐつと腕を引かれ、こずえは顔をしかめる。

「それと、私を義母と呼んではいけません。輿入れしたとはいえあなたは平民の生まれ、幹久どのの娘でなければこれほどの待遇はありません。分をわきまえるのです」

冷たく言い切られ、こずえは小さく、はい、と返した。

そして、春が訪れた。

「こずえさん、おなかの子の様子はどう？」

穏やかに話しかけてくる千晴は、縁側のこずえの隣に座り、アカリを膝の上に乗せた。

こずえは臨月を迎えていた。もうすぐ、新しい命と対面できるはずである。

しかし、こずえの顔は晴れなかった。

「もう少し……このままが続けばいいのにと、思います」

「そう？ 私は早く、この子に会いたいけどなあ」

旦影の継承の儀は明日行われる。様々な準備が滞りなく進んでいた。

あの穏やかな当代様でなく、旦影が当代様になってしまったら。

今後子供たちがどういう道を歩むのか、こずえは気が気でない。それを考えると、能天気な夫の口ぶりがいやに耳についてしまった。「名前を考えていたんだけど、どうかな、こずえさん」

「千晴さん……」

こらえていたものが、湧き上がる。

こずえは涙ながらに訴えた。

「千晴さん、私はこの子かアカリのどちらかを、大奥様に差し上げなければなりませんのです」

「何だつて？ 母上に？」

千晴は眉を上げると、すり寄るわが子を見た。

「一体それは、どういうことだい」

こずえは一切合財を、千晴に白状した。寢所から出てはいけな
いと言われたあの夜、縁側で見てしまったものこと。それを旦影に
知られ、脅されたこと。そして、大女将に子供を差し出すよう命じ
られたこと……話すにつれ、温和な千晴の顔が、みるみる険を帯び
ていくのが分かった。

「千晴さま、千晴さまもあのような、恐ろしいことがお出来な
のでしょうか？」

尋ねることすら恐ろしくて口にできなかつたことを、こずえは問
うた。

千晴はかぶりを振るう。

「私は見えての通りだし、病弱だから訓練を受けてはこなかった。だ
が旦影は、そういつた技も得意のはずだ」

「ではあの晩は、旦影さまが……」

「それは分からない。既にあなたも気づいているだろうが、この屋
敷には無数の忍天狗が護衛と監視についている。ねノ初^{はつ}！」

「はっ」

千晴が呼ぶと同時に、すっと黒い影が軒の上から降り、庭先に降
りた。影は下男の格好で跪いているが、まとう空気は明らかに違う。

千晴は影を厳しい表情で見下ろすと、踵を返した。

「こずえさん、部屋に戻ろう」

「あの方は……」

一瞬目を離れたすきに、影は形もなくなっていた。

「人払いを命じた。あれは私に忠実な天狗だ、心配いらぬ」

会話をしていた風には見えなかった。だが、いつも飄々として大らかな夫が別人のように振る舞っているの、こずえはアカリの手を引いて部屋に戻ると、全ての襖を閉め切ってしまった。

「幹久に使いを出した。こずえさん、アカリとおなかの子を連れて彼のところへ行くんだ」

「千晴さまは、どう、なさるので」

「私は……父上と旦影に話をつけなければならぬ」

千晴はどかりと腰を下ろすと、続けた。

「私は元来継承候補でなくなる代わりに、私の子も忍天狗にさせないという取り決めをした。あなたと婚姻するとき、改めて約束を交わしたはずなのに」

「旦影さまたちに、お子様が生まれぬから……」

「多分そうだろうね」

千晴は深々とため息をつく、白髪をかき上げた。

「父上は忍天狗の役目を少しずつ減らしていたのだよ。天狗の力も長い月日のうち随分薄まった。人を殺して回る世はもう終わり、これからは緩やかに、密やかに生きていこうというのが父上の方針だった」

「でも、大奥様はそんなこと一言も仰っていませんでした」

「だろうね。母上や旦影は、青龍を使って何か企んでいる」

千晴はすくと立ち上がる。

「どちらに行かれるのですか」

「準備をして、旦影たちに会ってくる。場合によつちやあ明日の継承の儀も先送りになるかもね……ああ、きみは心配することないよ」

見上げるこずえの頭を撫で、アカリもろとも抱きしめると、千晴はいつものように微笑んだ。

「さっきの話だけどね、生まれてくる子が男の子だったら、私は陽太郎って名がいいな」

私は日に当たることが出来ないから、と千晴は肩を竦めた。

よもや、それが夫との最後の会話になるうとは。

こずえの生みの苦しみが始まったのは、その直後だった。

「1916 後」

「1916 後」

幹久が朱雀亭に到着したのは、既に夜半頃であった。朱雀亭の門は堅く閉ざされ何者の訪問も今は拒んでいたが、幹久は易々と木を介し、侵入する。

こずえとアカリを連れ出す、その手筈は整っていた。侵入者であるはずの幹久に刺客はかからない。屋敷に配置されている忍天狗は、その多くが幹久の弟子であった。

幹久は年を取った今でこそ運転手をしているが、かつては焰村の名の下で活動する忍天狗だった。娘のこずえにそのことを明かさずに来られたのも、その功績があったからこそその皮肉である。

「狗堂くどうどの」

お屋敷の庭に下り立った幹久を手招いたのは、兎丸とまる銀二であった。

「兎丸どの、しばらくぶりです」

「このような形でお会いするとは、残念ですな」

「いや、まったく」

銀二が投げた分銅が、幹久の足を取った。

鎖巻きつくのはしかし脚ではない。銀二はそれに気づいた。松の幹である。

「やつ」

半身をずらして直撃を避けていた幹久は銀二に接近する。銀二はとつさに鎖を、その先の鎌を手放すように投げた。走る幹久がそれを回避する。銀二は跳躍すると、両腕でつかんだ松の枝でぐるりと回転し、音もなくその上に立つ。細い枝は折れぬ。

「兎丸どの、行かせてはもらえぬかな」

穏やかに幹久は話しかける。銀二の左右不均衡な顔がさらに歪んだ。

「娘ごは二子を産んでおる最中じゃ」

「なんだと？」

幹久の反応に、銀二はにやと笑った。

「そのご様子では、よもや、妊娠していることを知らずに来られたか」

「……孫が一人であろうと二人であろうと、このようなところにおいてはおれぬ」

「ではわしを退けてから、会いに行きなされ！」

折れ曲がった腰にそぐわぬ俊敏さで、銀二は上空から飛び降りる。幹久は同時に降ってきた刃の雨を跳んで避ける。撒菱である。

銀二は地に刺さっていた、鎖鎌を抜くと分銅を振る。撒菱に周囲を囲まれていた幹久は先ほどのように素早く避けることができず、左腕を絡め捕られた。

「身一つか、幹久どの」

ぎりぎりと、鎖に左腕が締まる。銀二はそれをぐいと引いた。幹久は体勢を崩す。鎌の刃が眼前に迫った。

そこに、幹久は組み付いた。腕に巻きつく鎖で鎌先を殴打し弾き飛ばすと、鎖を持つ側の銀二の脇を踏み抜く。苦悶の表情を浮かべて仰け反る銀二、その鎌を手放した腕を足で取ると、横倒しの肩に膝を乗せる形で体重をかけた。

ぼきと、音がする。鎖骨が外れたのだ。

「おまえさんを殺すのは惜しい。今宵はこれで失敬する」

言い置き、幹久は唸る銀二の腕を放すと、闇の中へと溶けていった。

おぎゃあ、おぎゃあ、と赤ん坊の泣く声が響く。

沐浴を終えた赤子が、こずえの肩口に降りてくる。その子を抱きとめながら、こずえはほうと息をついた。

「男の子か」

枕元には父、幹久があぐらをかいていた。アカリがその膝の上で、うつらうつらと舟をこいでいる。もう夜も明けるころだろう。

「父さん、千晴さまは……」
「うむ」

襖を振り返り、幹久は言葉を濁す。

「よもやそこまで、外道とは……と、思うが」
「父さん？」

揺れた拍子にか、アカリがぱちんと目を覚ます。眠がる娘の頬をつまんでやりながら、こずえは父を見上げた。

産婆が引き上げていく。無事に生まれたというのに、誰も子の様子を見に来る者はいない。その静けさが妙に、お産直後のこずえを不安にかりたてた。

「こずえよ、わしはあまり長居出来ぬ」

そう、父は規律を破ってここに居るのだ。

こずえは幹久を見つめ、意を決して言った。

「アカリとこの子を頼みます」

「生まれたばかりの子をか」

「ここにいたら人を殺す道具にされてしまいます……それだけは避けなければ。私はまだ動けませんし、千晴さまを独りにはできません」

予感を感じて、こずえは目を細めた。

「父さん、どうかお元気で」

別れの言葉に父は何も返さず、無言でこずえの額を撫でると、赤ん坊を抱き上げた。

赤子を固定するように胸に巻くと、幹久はアカリを背負う。そして現れた時と同じように、襖を音もなく開け、消えるようにいなくなってしまうた。

「どうか、ご無事で……」

幹久が去っていたのと反対側の襖の向こうで慌ただしい足音が近づいてくる。

がらと襖を開けたのは、鬼気迫る表情の旦影あさかげであった。

その左手が刀を、それも紅の滴りが刃を鈍らせているのを見て、

こずえはひつと肩を起こした。

「けしかけたな、この鬼女が！」

「何を……」

「落ち着きなされ、次代様！」

「離せ！」

旦影の腰に組み付いたのは銀二だった。左手をだらりと下げ、右手だけで絡みつくように旦影にしがみついている。

血に塗れた切っ先がこずえを向いた。

「貴様のせいで、わしの儀は先送りじゃ。産んだ子はどこだ？」

家諸共斬り殺してくれるわ！」

「赤子にはおりませなんだ……奪われました」

「何だと？」

銀二はしがみついたままの姿勢で答えた。

「子は二人とも、狗堂が連れて行きました」

「ちい……千晴め、最期まで禍根を残しおって」

「お、お待ちください、千晴さまは……」

震える腕を伸ばしたこずえに、旦影は急にいと気味の悪い笑みを浮かべた。

「おまえ、この剣の血糊を何だと思ったのだ？」

旦影はさつと縁側に戻ると、何かをずるずると引きずりながら現れた。

こずえは遂に悲鳴を上げる。

「いやああああ！」

「おまえの招いた事よ！ とくと見ろ、おまえの夫じゃ！！」

白銀の髪と着物は赤黒く染まっていた。見紛うものか、切り刻まれたそれは変わり果てた千晴の姿だった。

無残な屍に這いつくばるように、こずえは慟哭する。その髪を旦影が乱暴に引いた。

「おまえは殺さんでおいてやろう。この因果を見届けるがいい、わしが当主になる日までな！」

巨影の継承の儀は行われず仕舞い、とは風の声より幹久の耳にも伝わった。

兄弟喧嘩の果てに兄を殺害したことが、当代様の逆鱗に触れたらしかつた。それがどうやら幹久に追手が付かぬ理由であることも、同じ風に聞いたことである。

こずえがどうなったのか、そこまでは分からなかった。もはや幹久は葉隠山に戻ることは出来ない。追放同然で、幹久は忍天狗をはぐれたのだ。朱雀亭を訪れるときは、今度こそ死を覚悟せねばならぬだろう。

しかしまだ幹久は死ぬわけにはいかぬ。乳飲み子とその幼い姉を、焰村の手に渡すわけにはいかぬ。子らの母と父がそう願った限りは。

「まずは、おまえに名を授けねばならぬの……」
無邪気に笑う赤子に、幹久は目を細めた。

「序部おわり」

「1916 後」(後書き)

序部はここまです。次回から第一部に入ります。

「1-1/4」

青萌える山ふもと、にぎやかな声が響く木造の校舎がある。

ふせかりむら
伏雁村に唯一ある、尋常小学校であった。

伏雁村は田畑の広がる、長閑な、どこにでもあるような田舎の村である。小学校の門が開き、下校する児童たちが畦道に散っていく。笹を持つ子供が目立つ。今晚は七夕であった。

梅雨の季節ながら、今日の空は晴天である。天の川はきつと見ることが出来るだろう。

一つの道を、学校に通い始めたばかりの男の子と女の子、そして保護者然として付いていく高学年の女の子が歩いている。よく見れば男の子は泣きじゃくり、それを同じ年くらいの女の子が慰めるように手を引いていた。

「まったく、いつまでグズグズしてんの」

後ろでゆっくり歩いている年長の少女が、あきれた口調で言った。彼女は男の子の姉であった。

「だって、あいつ、ら、が」

しゃくり上げながらも少年は言い訳する。この子は校門を出たばかりのところと同級生にいじめられているところを、姉に助けられたのだった。

勝気な姉はふんと鼻を鳴らす。

「前々から言っているように、あんたがおどしてるから苛められるんだよ。何にも悪いことしてないんだ、胸張ってりゃいいのにさ」

「だって……」

「だってじゃない！ たたく男のくせに、びーびー泣くなっ」

姉の怒声に、少年は怯えたように肩を竦ませる。その頭を、付き添って歩く女の子が優しく撫でた。

「ようちゃんは、やさしいんだもんね。いいの。ゆかりと一緒にい
てあげるもの」

紫ゆかりという名のその少女は、姉弟の隣人で幼馴染だ。

「ようちゃんはね、おはじきにおてまりにゴムとび、とつても上手
いのよ。今度あかりちゃんにも見せてあげる」

振り返った先にいた少年の姉　　灯里あかりは、紫の言いざまに苦笑
いした。

「まるきり女の子の遊びじゃん……ひよっとして、よっすけ煬介の奴、女の
子としか遊んでないの？」

「うん」

満面の笑みで大きく首肯した紫に、少年　　煬介は恥ずかしそ
うに俯いた。恥ずかしい、という自覚があるだけマシである。姉は
ため息をついた。

やがて長屋が密集した集落に帰り着いた。隣家の板戸の前で立ち
止まる紫に手を振って、姉弟は自宅の板戸を開ける。

「ただいま帰りました」

「ただいま」

返事はない。玄関を入ってすぐの居間のちゃぶ台の上にあった置
手紙を取り上げ、灯里は顔をしかめた。

「じいさま、またお仕事だって」

「街に行ったの？」

「さあね。夕飯は紫ちゃんちで世話ンなれってさ」

教科書を詰めたカバンを放り出して、灯里は玄関に立ち戻る。

「姉ちゃん、どこ行くの？」

「いっちゃんどこに行ってくる。あんたも行く？」

いっちゃんは灯里の親友の女の子だ。しかし、煬介は灯里よりさ
らに体が一回り大きいいっちゃんが苦手だった。いっちゃんはけし
て乱暴な女の子ではないが、大きいというだけで煬介には恐ろしい。

「ん、いいよ」

「そ。じゃね」

姉はあっさり家を飛び出して行ってしまった。煬介は開けっ放しの玄関戸に手をかけると、板戸の傍にかけかけてあった、自分と姉の笹を見つける。

姉の笹には“いっちゃんずっと一しよにいられますように”という短冊と、“ようが男の子らしくなりますように”と書かれた短冊がつけられていた。二個もお願い事が吊られているところが姉らしいと、煬介はくすりと笑った。

一方の煬介自身の笹にある短冊は、半分に破り取られていた。暗い顔で煬介はそれを見る。帰り道に泣いていたのは、いじめっ子にこの仕打ちを受けたからだだった。

本来短冊にはこう書かれてあった “父ちゃんと母ちゃんができますように”。

いじめっ子にからかわれるまでもなく煬介にも分かっている。親が子のあとに出来るはずがない。こんな願いが叶うはずはない。煬介は生まれてこのかたずっと、姉と祖父だけと暮らしている。

何故煬介と灯里に両親がいないのかは知らない。生きているのかどうかすら、祖父は教えてくれぬし尋ねても怖い顔になるばかりだ。

「おかえりなさい、煬介ちゃん」

隣の板戸が開いて、女のえくぼ顔が覗く。

「おばちゃん」

紫の母、立花^{りっか}である。煬介は相好を崩すと、立花の膝に飛びついた。

「ああ、煬介ちゃんは甘えんぼね」

「ようちゃん、うちに来て遊びましょよ」

家の中から紫が手招きする。

煬介は大きく頷いた。

街と言っても、寂れた街だ。

洒落たカフェーなどがある都会でもない。茶店の軒先に腰掛け、男はふうと息をついた。真白に染まりきった髪に、縮めた身体はす

つまり老爺のそれである。目をしょぼしょぼと瞬かせ、女中に緑茶を注文すると、老いぼれた男はぼんやりと正面を眺めた。傍らに置いた背負い箱は今日も軽くなならない。男は実入りの少ない薬売りであつた。

目の前を豆腐屋が通過していく。

「火に入る虫の言伝に」

そのときである、男の目がぎろりと上を向いた。

蛇のような睨みは、見たものをぞつとさせるような鋭さを放っている。

「……お孫さまがたは、お元気ですかな」

どことも知れぬ声が響いた。先の、暗号めいた言葉を呟いたのと同じものである。

腰かける男は、凜然と応じた。

「わしの目の黒いうちは、指一本子らには触れさせぬぞ」

「結構。こちらも、あなたに再びやる気を出して頂けたことは有難いのですから」

男 狗堂幹久は、姿なき声にため息を返した。

時は、大正十三年。

焰村千晴ちほるの忘れ形見が生まれてから、七年の月日が過ぎていた。

幼い姉弟は祖父、幹久が引き取り養育することを許されていた。

しかしそれは、幹久が再び陽忍 表向き普通の生活をしながら

諜報活動を行う忍びとして働くこと、そして姉弟に忍天狗しのびてんぐの手ほどきを行うことが条件であつた。

前者はこのように、朱雀天狗の使者とやり取りをしていることから明白である。後者に関しては……子らがまだ幼いことから、基本的な身体の訓練、知識の教育のみにとどまっている。今後どうそれが発展するのかは、まだ不明瞭だが このままゆきずりに、彼らが忍天狗となることだけは避けたかつた。

だから、幹久は命じられるがまま動き、務めを遂行する。

それが唯一、孫らを泥の沼から掬い上げる術だと信じて。

「して、仕事は何じゃ
」
こうしてまた、孫を抱く幹久の手は汚れゆく。

「1-2/4」

夏休みが終わってしまふ。

八月三十一日を示した日表を呆然と眺めていた^{よつすけ}煬介に、後ろから^{あかり}灯里が声をかけた。

「煬介、おまえ、ほとんど遊びにも行かなかつたね」

「あ、遊んでたもん」

「^{ゆかり}紫ちゃんど？」

「うん……」

畔に行つて蛙を捕まえたり、山の方で虫を探したり、押し花を作つたり。外には出て遊んでいたので、煬介はすっかり日焼けしている。

真つ黒になつている灯里に比べれば、ほんの少しだが。

「マサカズが怒つてたよ、あんたがほとんど顔出さねエって」

煬介は身を縮めた。子供には子供の社会があり、それを仕切っている存在もある。マサカズは^{ふせかりむら}伏雁村のガキ大将だ。この界隈の男の子たちは皆彼に従う。だけど煬介は、マサカズが大の苦手だった。いつも彼やその舎弟に見つからないようにして逃げ回っている。

「灯里、煬介をいじめてないで手を動かさな」

縁側で、山から拾つてきた草花を選別している祖父が声をかけてきた。これらは薬草で、大半を灯里の手元にあるすり鉢で粉にし、生薬にする。

灯里はすりこぎを動かしながら、口をくちばしみたいにした。

「ちえつ、今日はいつちちゃんと約束してたつてのにさ」

「文句言つんじゃねえ。おめえらの飯のタネじゃ」

「それよか、じいさま。あたい、やつぱり女学校に行きてえ」

選り分ける手を止め、祖父 幹久が灯里を見た。

「薬師はいやか」

「いやっていうか……あたいは先生になりたいんだよ。薬売りよりかよっぼどさ」

「そうか」

作業に戻った祖父に、灯里が渋い顔をする。

「いいの？ 悪いの？」

「おまえの好きにすればいいさ。好きなこと出来るのも今のうちじや」

祖父はよくこういった含みのある言葉を口にする。灯里もその棘を感じてか、大きく息を吸い込み、わざとらしく吐き出した。

「絶対いやなもんはあるよ。あたいは、天狗だけにやなりたくねえ」

「灯里」

叱咤するように幹久が名を呼ぶ。灯里は気にせず続けた。

「天狗の修業だっただいきらい。あたいはもつと遊びたいし、ほかのことしてえもん！」

「灯里！」

灯里はぼいとすり鉢とすりこぎを煬介に投げると、風のように軽やかに素早く、玄関に跳んでいった。

「よう、あとは頼むわね」

からからと笑い声を立て、灯里は玄関戸を抜けていつてしまった。呆気にとられつつ、投げられたものをきちんと受け止めていた煬介は、とまどいながら祖父を見た。

幹久は厳しい顔をしていたが、やがて諦めたようにため息をつく。

「あのお転婆にも、困ったもんだな……」

「お、おいら、手伝うから」

薬草の区別はままならないが、擦るくらいなら煬介にも出来る。

おどおどと幹久に近づくと、彼はぼんと煬介の頭に手を乗せた。

「おまえはいい子だな、煬介や」

「おいらさ、天狗のしゅぎようもね、きれいじゃないよ」

褒められたのが嬉しくて、本心からそう言ったが、何故だか幹久は複雑な表情をした。

隣家に住む紫の母、立花は、^{しづか} 煬介と紫が赤子のときから病がちだった。

幹久の薬があるので普通の生活をしていられるが、時々病に負けて臥せってしまうことがある。それはひどく煬介の心を痛めた。立花の乳をもらって育った煬介にとって彼女は母も同然の存在なのだ。熱心に看病する紫の姿も、それに輪をかけた。

始業式の日、紫は学校を欠席した。

「おう、ヨースケ。今日はいとしのゆかりちゃんと一緒じゃねえのかよ」

早速、同級生が囁し立ててくる。煬介は困り顔を作ったが、無言であった。野次より何より、紫が心配だったからだ。

おそらくまた、立花の体調が悪くなったのだろう。

学校から帰ったら、すぐに紫ちゃんちに行こう。姉ちゃんにも言つて、街に出ているはずのじいちゃんを呼んできてもらおう、そうしたらまた、きっとおばちゃんの加減も良くなるはず

しかしその刹那。

地響きと恐ろしい揺れが、煬介を襲った。

揺れが収まりきると同時に、教師の指示に従って児童たちは表に出た。一年生の教室は一階だが、二階から降りてきた高学年たちとも合流し、校庭に整列し始める。

繰り返す大きな揺れ。校舎や塀がみしみしと鳴るたびに、児童たちから悲鳴が上がる。混乱と恐怖で泣き出す子供たちもいた。しがみつかれる教師すら、青白い顔をしている。

煬介は半泣きになりながら、姉を探した。きよろきよろと周りを見渡している灯里を見つけて、煬介は叫びながらすがりつく。

「姉ちゃん！」

「煬介！ 良かった、怪我ないね！」

姉はこんなときでも澁刺としていた。降ってきたガラスのかけら

で怪我をしていた同級生の手当をして、灯里は煬介に向き直る。

「あつ、村が」

誰ともなく発した声に、煬介はそちらを見た。小学校を囲う塀の向こうに、黒い煙がいくつも立ちのぼっている。

煬介たちの家がある、集落の方向だ。

「わああん、かあちゃん！」

「怖いよう、怖いよう!!」

阿鼻叫喚を増す校庭、未だ人の残る校舎は心なしか傾いているように思える。

煬介は姉から手を放した。目は集落からのぼる煙だけを見ている。

「姉ちゃん、家が燃えてるかも」

「だめだよ、煬介。危ないよ」

「紫ちゃんとおばちゃんが家にいるよ。助けないと」

「煬介！」

灯里の伸ばした手が空を切る。

煬介は既に駆け出していた。堰を切ったかのように、児童の中からも自分の家に向かって走り出す者がいた。煬介はその先頭で校門を出ると、一目散に集落に向かって、駆けた。

近づくにつれ火は勢を増していくかのようだった。木でできた家々は脆く、家財道具の一切を持って転がるように逃げ出す人々とすれ違う。

だれか、助けて。

足が挟まれてるの、だれか。

おばあちゃんがいる、手を貸してくれ。

聞こえる声を聴かぬようにしながら、煬介は煙の中を掻い潜り、集落の奥へと向かう。

たどり着いた長屋は、ペしゃんに潰れてしまっていた。

煙と炎の勢いがひどい。家のあったところまで行き着いたが、木材の山にしか見えない。煬介は地べたに耳を寄せた。

火の爆せる音が邪魔だったが、ごんごんと地を打つ音が微かに聞

こえる。ぱつと顔を上げ、煬介は家があったあたりを見渡した。

「紫ちゃん、おばちゃん！」

叫びながら、瓦礫を掻き分ける　　といつても、七つの煬介に出来るのは、屋根板の一部をはがしていくことくらいだ。

しかし間もなく煬介は見つけることが出来た。

真っ赤な柘榴のような、それを。

「おばちゃ……」

材木の直撃を受けたのか、笑うとえくぼの出る美しい顔は、原型を留めていなかった。

そのときには泣き声はつきり聞こえていた。くの字に曲げた立花の腹の内側に、泣きじゃくる紫の姿があった。

「紫ちゃん！」

紫も真っ赤であったが、それは彼女の血ではないようだ。立花の身体を押して隙間を作るが、代わりに材木の切れ端がずれて、なかなか紫を引き出すことが出来ない。

ぱちぱちという炎の音が近づいてきていた。紫はあまりのことに混乱し泣くばかりで、暴れて上手く身体を持ち上げられない。

「紫ちゃん、おばさんの腹に足のせて、上がって」

「できない、できないよう、ようちゃん、こわい！　こわい」

「大丈夫、できるよ、早く」

後ろを振り返り、煬介は戦慄した。

黒煙が背中を炙るほどそばまで来ていたのだ。

「紫ちゃん」

「ようちゃんどうしよう、死んじゃうよう」

「足、足早く！」

そのとき、紫の足は偶然、倒れてきた立花の身体に押し出されるようにして浮いた。煬介は無我夢中で紫を引っ張り出す。

「立って早く！　逃げよう！」

「お母ちゃんも早く」

「おばちゃんはもうダメだ、早く！」

とにかく紫の手を引いて、煬介は走った。

炎は迫ってくる。あたりを覆う黒煙の中、とにかく必死になって煬介は駆けた。たんぼに片足を突っ込んで、ようやく煬介は我を取り戻す。

「煬介、ばか！」

姉の声が響いた。紫ごと、煬介は灯里に抱きしめられる。

紫の手首を掴んでいる指がはがせない。何を言うこともなく、紫はひたすら泣き続けている。

すぐそばの広い道路では、大人たちが呆然と、燃える集落を眺めていた。火は迫りつつある。ここもいずれ赤と黒に吞まれるであろう。

「姉ちゃん、おばちゃんが死んじゃった」

灯里にしがみつきながら訴えると、彼女はばんばんと煬介の背を叩いた。

「地震のせいだよ、仕方ないんだよ」

「おばちゃん、死んじゃったよ。姉ちゃん、じいちゃんは」

「じいさまは分らん。でも、おまえはようやったよ。紫ちゃん助けたる」

「でも」

「おまえのせいじゃない、だからようにはどうしようもなかったんだよ。仕方ないの！」

姉は必死になってそう言った。

煬介は集落を振り返った。

恐ろしいほどの赤と黒が、天を蹂躪するように立ち上っていた。

「1-3/4」

地震のあったその日、幹久は戻って来なかった。

姉弟は紫ゆかりを連れて学校に戻り、ほとんど真つ暗な闇の中、避難してきた近所の人たちと肩を寄せ合い、震えながら校庭で一夜を明かした。何度も余震があったが、最早悲鳴をあげる体力すらなかった。心身ともにみな疲れ切っていたのだ。

やがて夜は明けたが、稲穂繁る田はどこどころ焼け、焦げの臭いが空気にこびりついていた。見渡す田園には燻る火が点々と、未だ黒い煙をあげ続けている。

大人たちは手分けして火を消し、村の生き残りを探す。それだけでまた夜が来て、朝が訪れる。その頃ようやく祖父が街から帰ってきた。

街も同じような状態だったらしい。木造の建物は大半が焼けてしまったそうだ。昼餉の用意をする時間どき、火を使っていた家庭は多かった。それが、大工事の原因を作った。

幸いにも村の備蓄庫は、崩落したものの火に巻き込まれはしなかった。焼けずに残った食糧をみなで分けながら、伏雁村ふせかりむらの人々はそのろと復興の道を歩き始めた。

焼けたものは建て直せる。だが失われた命はもう戻ってこない。それが人々の重しとして足を引く。母代わりを失った姉弟、そして紫も同様だった。

立花の遺体は燃え残らなかった。幹久が、遺骨だと言って持ってきた骨壺を、墓地に埋めて弔った。紫はまだ母を亡くした実感がない。しかし煬介は、はつきりと立花の死を見てしまった。

あれが、人の死というものなのだ。

あの日聞いた、助けを求める無数の声が耳から離れない。あの何人が助かったのだらう。ぐるぐると回るような感情を、煬介は

まだ理解できない。自責という名の後悔だった。

「ようちゃん、ようちゃんはどこにも行かないでね」

母に二度と会えないのだということを呑みこみ始めた紫は、ぎゅつと煬介の手を握ってそう言った。

煬介はその手を握り返す。

「もちろんだよ。紫ちゃんはおいらが守ってあげるんだ」

そう、炎や煙に立ち向かうのはとても恐ろしかったけれど、煬介は紫を助けることが出来た。

立花はもういない。だったらその代わりに、煬介が紫を守るのだ。一つの体験を期に、煬介はそう、強く決心をした。

やがて本格的な秋が訪れる。

その頃、伏雁村は一応の平穏を取り戻しつつあった。収穫期に入ったためである。死者を偲ぶばかりでは飯は食われない。否が応でも顔を上げ、現実と向き合う必要があったのだ。

幹久も薬売り巡業を再開していた。その日、建て直した長屋で紫と共に遊んでいた煬介は、祖父が見知らぬ男を連れ帰ったのを見た。立派なひげを蓄えた、のっぽの紳士であった。灰色の帽子を取って彼は挨拶をした。煬介も丁寧に辞儀を返すと、紳士は目を細めて少年たちに近づいた。

「紫、こんなに大きくなって。おまえだけでも無事でよかった」

目をぱちくりとする紫を、紳士がぎゅつと抱きしめた。

「おじさんは、だれ？」

そこへ、いったん家に引っ込んだ幹久が顔を出した。

曰く、紳士は紫の父親なのだという。煬介は飛び上がった。

「おじさん、うっそつけ！ 紫ちゃんに父ちゃんはいないんだ！」

紳士は困ったように眉を下げると、答えた。

「いや、きみが怒るのももっともだ。……今まで別々に過ごしていたのだからね。だが、私は紫の父なのだよ。正真正銘、本物の」
「だったら、証拠をみせてみろっ」

「これ。やめんか、煬介」

幹久がぱつと煬介の手足を捕まえる。見上げると、祖父はゆつくりかぶりを振った。

「紫ちゃんのお父君は、帝都で造船業をなさっているのだよ。お忙しくて、なかなか会いに来られなかつたんじゃない」

「妻が……紫の母が死に、紫が独りぼつちになってしまったと狗堂さんに聞いてね、慌ててやってきたのだ」

「紫ちゃんは独りぼつちじゃないやい、おいらたちがいるもん」

「しかしだ、煬介。紫ちゃんのお父君がご健在な限り、紫ちゃんはお父さんと暮らすのが一番良いんじゃないよ」

煬介は目を丸くして紳士を見た。

「それって、おじさんが紫ちゃんを引き取るってこと？」

「そうだよ……今まで、紫と仲良くしてくれてありがとう」

紫と手を繋いだまま深々と頭を下げる紳士に、煬介は言葉を失う。

「ゆかり、お引越しするの？」

「うん。今まで寂しい思いをさせたね、これからはパパと一緒に暮らすんだよ」

「やだっ！」

紫は紳士から腕を振りほどいた。その刹那、煬介は両手を掴まれた状態で幹久の膝を蹴り、くるりと一回転した。ねじれた腕に、幹久は反射的に手を放す。

煬介は着地すると、紫の手を取り、風のように小道へ駆け抜けた。

「待たんか、煬介！」

「紫！」

やるようになりよつたわ、という祖父の呟きを背に、煬介は紫を連れて逃げた。

「1-4/4」

「ねえ、ようちゃん。どこまで、行くの」

紫は息を弾ませながら言った。煬介が立ち止まると、自然と二人の手は離れる。

無我夢中で駆け抜けて、気づけば二人は隣の集落までたどり着いていた。あまり来たことがない町並みを煬介が見渡すと、その背後から声がかかる。

「おっ、ハナタレヨースケじゃねえか」

嫌な奴に見つかってしまった。

そこにいたのはガキ大将のマサカズであった。一緒に遊んでいたとみられる、小僧たち数人と一緒である。

「二人でお手手つないで、なかよしこよしの花いちもんめかあ？」

「おはじきか、それともゴムとびか？」

「跳んでみせるよ、ほれ、ぴょん、ぴょん」

ウサギの物まねをする取り巻きの一人が、紫を体当たりで突き飛ばした。

「あっ」

「紫ちゃん！」

ころんだ紫を助けようとして屈んだ煬介は、もう一人近づくと少年に気づかなかった。

勢いよく肩を押されて、煬介は側溝に転落する。

「ようちゃん！」

げらげらと上がる笑い声。ドブ水を頭からかぶった煬介は、半泣きで身体を起こした。

「おいやめろ」

マサカズが言うと、哄笑はぴたりと止まった。

紫の手を借りて側溝から上がった煬介の眼前にしゃがみこみ、マ

サカズは煬介の胸倉を掴む。

「おまえ、調子に乗ってんじゃねえぞ。なんでいつもおれの言っとおり集まらないんだ」

「く、くるしい」

「おれに逆らえるのかよ、弱虫のくせによ」

突き飛ばされ、煬介は再びドブに落下する。上がった歓声に、紫が怒った。

「なによ、よってたかって、ひきょうじゃない!」

「卑怯だって?」

「そうよ。ようちゃんは弱虫じゃないわ。おおぜいでいじめる、あんたたちのほうがよっぽど弱虫よ!」

「紫ちゃ……」

やめてと言おうとしたが、煬介はドブ水に咳き込んだ。

マサカズはふんと上向きの鼻を鳴らす。

「おれは女にもようしゃがねえぞ。いいか、あやまんなら今のうちだ」

「あやまるのはあなたたちよ、ばか! 弱虫! いくじなし!」

マサカズは茹蛸のように真っ赤になると、紫をどんと突き飛ばした。

紫の身体が宙に浮く。妙にゆっくりに感じる。側溝に降った彼女を、煬介は下敷きになって庇った。ドブ水が飛び散る。圧力に、煬介は息を詰まらせた。

「けっけっけ、ドブ川で二人なかよくおよいどけ!」

「マサカズに逆らうから、こんな目にあうんだぜ」

声ははっきりと聞こえるが視界がちかちかしている。むきになっているらしい紫が、甲高い声で叫んでいた。

じわと、煬介の目に涙がにじむ。

だめだ。泣いちゃだめだ。

それでも感情は正直だ。

やっぱり、おいらは弱虫なんだ。

「おい、もう行こうぜ」

「あばよ、弱虫！ あとでちゃんと顔出せよ！」

「誰が弱虫だつて？」

割り込んだ声は女のものだった。

ようやく落ち着いた視界が開く。とまどうようにあとずさる、マサカズ一行の正面に、鬼の形相の娘が一人立つ

灯里^{あかり}である。

灯里はむんずと、マサカズの取り巻きの胸倉を掴むと、えいやつと投げ捨てた。

放り投げられた身体が別の取り巻きにぶつかる。灯里はマサカズにすらグーで殴り掛かると、男の子たちを独りでぼこぼこにノしてしまった。

泣きながら逃げ帰るマサカズたちをよそに、灯里は紫を側溝から引きあげてやる。紫は半泣きだったが、泣いてはいなかった。

煬介は自力で上がった。わんわんと泣いていた。

「泣くな！ じいさまに言われて探しに来たら、紫ちゃんをケンカに巻き込むなんて、この馬鹿！」

ごちんと、灯里の怒声と鉄拳が煬介のどたまに落ちる。余計火が点いたように泣く煬介の前に、泥まみれの紫が立った。

「やめて、あかりちゃん。ようちゃんのせいじゃないの」

「あれま、紫ちゃんも泥つかすじゃないの！ かわいそうに」

きつと煬介を睨みつける灯里に、紫は触れないようにしながらも、視界をふさぐように腕を振る。

「ちがうの、ようちゃんのせいじゃないの。怒らないであげて！」

あたしが悪いの、あたしが……」

目を潤ませる紫に、灯里は慌てて言った。

「分かった分かった、怒らないから。あんたまで泣いてちゃ、あたいがじいさまに怒られちゃうよ」

その帰り道、先頭の灯里と手を繋ぐ紫はとぼとぼと進んでいく。

そして、紫に手を引かれて歩く煬介はまだぐずぐずと泣いていた。

「いつまで泣いてんの、本当に情けないねあんたは」

「だって……」

言われなくても分かっている。情けない自分に煬介は泣いていた。紫ちゃんを守るだなんて、よくそんなこと言えたもんだ。天国のおばちゃんも呆れていることだろう。こんなんじゃ、紫ちゃんは父ちゃんと一緒に暮らした方が、正解だろう。

「あかりちゃん、ゆかり、ようちゃんとはなれたくないよ。あかりちゃんとも」

ぼつりとこぼれた紫の言葉に、灯里は唸る。

「あたいだって一緒にいたいよ。でも……紫ちゃんの父ちゃんはお金持ちなんだろ、そっちにいった方がきつと紫ちゃんのためだよ」

「うっん、お金なんかいらぬ。あたしはここがいいもの」

くると後ろを煬介を向いて、紫は困ったように訊いてきた。

「ようちゃんはどつ？」

そりやもちろん、ずっと一緒にいたい。

だけれども、即答できるほど煬介は度胸がない。あんなふうにした苛められたら、紫がかわいそうだからだ。

答えない煬介に、紫は不安そうに眉を寄せる。ジト目をした灯里がふんと鼻を鳴らした。

「臆病モン」

灯里の罵り口にも、煬介はじっと耐えていた。

翌日、紫は父に連れられて、東京へ発つことになった。

急な話だが、紫の父は忙しいらしい。

彼は車で来ていた。集落を出たところのやや広い道に止めてあるそれを、村の子供たちが物珍しげに見ている。庭先からその光景が見えている。紫を泥まみれにさせたことで祖父から大目玉を食らった煬介は、見送りの時間にも縁側でしょぼくれていた。

「紫ちゃん、行っちゃうよ。いいの？」

呼びに来た灯里が、煬介に声をかける。

ずっとしょんぼりしている煬介が、さすがに心配になったらしい。

灯里は煬介のとなりに座ると、背中をさする。

仲良しの女の子たちから綺麗なお手玉をもらい、紫が車に乗り込もうとしている。

「もう会えないかもしれないのよ。言いたいことがあったら、今のうちに言っときな」

そう言うと、灯里は庭に降りて、低い柵を乗り越えた。狭い川堀づてに道へ降りると、車へ近づいていく。

煬介はぱつと立ち上がった。

灯里に手を振った紫が、車の扉に閉ざされる。

「紫ちゃん！」

転がるように駆け出して、煬介は柵を飛び越えた。川堀を落ち、道に飛び出して、車を走って追いかける。

車の後ろの狭い窓から、紫が必死に手を振っているのが見えた。

追いかけながら、煬介は叫ぶ。手を振りながら、徐々に離れていく距離を感じながら。

「紫ちゃん、また、またね！ またねえ！」

真っ直ぐに伸びる土の道を、車は走っていく。

「またね……」

息を切らせながら、煬介は立ち止まった。

車は走っていく。その、先に続く空は快晴だった。

また、いつか。

臆病者と呼ばれないくらい、強くなったら。

紫に会いに行こう。

まぶしい空に目を細め、煬介は決意した。

「2・1/4」

「ああ、もう！ 姉ちゃんのばか！ なんて起こしてくれなかったのさー！」

時計に視線を送りながら、煬介は下駄に足を滑り込ませた。駆け出す瞬間、怒鳴り声が追いかけてくる。

「煬介！ お弁当！！」

「もー！！」

制服で顔を出した姉の差し出した包みをひつたくると、煬介は家を飛び出していった。その背に灯里はこぶしあかりを振り上げる。

「ありがとうございますくらい言わんかー！」

「ありが十匹、ありがとさーん！ 行ってきますーす」

「もー……」

「毎朝毎朝、騒がしいの」

ゆっくりと茶を飲む祖父の姿に、灯里は仁王立ちで眉を寄せる。

「だったらじいさまからも言っちゃってよ。あたしの女学校の方が、小学校の方より遠くて大変なんだから」

「そういうおまえは、ゆっくりしとつてもええのか」

「あっ！」

灯里は自分の分の弁当包みと鞆を持ち上げると、玄関に駆け付けた。

「行ってきますー！」

「気を付けてな」

灯里の女学校は街にある。が、灯里の脚は普通の女学生の何倍も速いので遅刻はしないだろう。

「じいさま」

もう行ったかと思われた灯里が、玄関戸から覗いている。

隣に、背広にネクタイを締めた男性が立っていた。男は帽子を脱

くと、灯里を見た。

「灯里さん、お久しぶりです。セーラー服がお似合いですよ」

灯里は不愉快そうに顔をしかめる。

「あたし、学校行かなくちゃ」

「まあお待ちなさい。ゆっくりお話ししたい案件もあることですし、今日ぐらいいかがですか」

男の有無を言わせぬ雰囲気、灯里はたじろいで幹久を見る。

幹久は告げた。

「灯里、行きなさい」

「……うん」

灯里は男の脇を過ぎ去ると、逃げるようにいなくなった。

その背を見送り、男は玄関口から幹久を覗く。

「煬介君はいらっしゃらないので？」

「家に来るなど何度言ったら分かるのだ」

押し殺した怒りを滲ませながら幹久が答えると、男は飄々と応じた。

「なに、お子らのご成長を見たかったですよ。他意はありません」

男は家に入ってこない。今立ち入れば、己がどんな目に遭うか理解しているのだろう。

「おぬしら、既に灯里に“おつとめ”をさせておるらしいな。わしが誤魔化せると思ったか」

「思っておりませんよ。狗堂いぬくどのこそ、いずれは灯里さんも歩む道だのご存じだったはず。煬介君も」

「たわけ、まだ言うか！」

怒声を浴びせると、びりびりと長屋が揺れた。男は肩を竦ませるが、応じた声音は落ち着いている。

「それはそうと、要件をお伝えしてもかまいませんか。火に入る虫の言伝に参りましたので」

幹久は陰の帯びた目を、ゆっくりと閉じた。歯ぎしりする。

「……入れ」

「では、お言葉に甘えて。失礼致します」

男は音もなく進むと、玄關戸を閉めた。

座敷に上がり、幹久が差し出した座布団の上に座すと、男
忍天狗しのびてんくの連絡役は口を開いた。

「治安維持法が、春口にも制定されるそうです」

過激な共産主義　　ひらたくいえば、反政府活動を取り締まる
ための法律だ。男は続ける。

「同時に、普通選挙法も改正されるそうです」

「飴と鞭というわけか、ふん」

「先月に、我が国とソビエト連邦の間に国交が樹立しました。まあ、
それに引きずられて革命運動が激化するのを抑えるためでしょうな」

「しかし普通選挙か……枢密院がよく許したの」

「おっしゃる通り、飴と鞭ですよ。普通選挙自体もすぐさま行われ
るといふものではありません。実質、政治活動に対する圧力は増す
ものと思われます」

「それで、本題は何じゃ。数日の中には新聞に載るようなことを談
義しにきたわけでもなからう」

幹久がそう振ると、連絡役はにいと笑った。

「狗堂どのにお願いしたいのは、無産政党支持者の監視です。共産
主義と社会主義が非合法とされる上で、彼らの支持を受け合法的に
政党として活動できるのはご存じのとおり、無産政党のみです。す
でに何人か若いネズミを潜らせていますが、狗堂どのには彼らの手
綱を握って頂きたい」

「おぬしらとネズミの橋渡しをせいということか？」

「さすがご察しが早い。表向き、支持者の監視ですが、実質ネズミ
たちの監視ですね」

男は困ったように続けた。

「無産政党の支持者は、そのほとんどが労働者、そして農民です。
下忍の若者の生家もそれらであることが多いのですし、彼らもある

意味下級労働者ですからね。影響される者も中にはいるのですよ」
見下した口調だが、使い天狗などこんなものだ。幹久は鼻を鳴らした。

「わしもそのうちに入るのじゃが」

「あなたは裏切りませんかでしょう？」

「ごく当然のように言い返され、幹久は答えに窮す。

幹久には孫らがいる。

彼らを守るために、幹久は再び忍天狗に舞い戻ったのだ。

「……裏切らぬ」

連絡役は満足そうにうなずくと、立ち上がった。

「近日中に別の連絡役を派遣します。では」

来たときと同じ唐突さで連絡役は去っていった。

幹久は深いため息をついた。老いぼれになおも働けと命ず組織にも、またその任務の内容にも。幹久はこの仕事を再開してから隊を組む任務に従事したことはなく、忍天狗の頭たちとその連絡役以外にその復帰を知る者もなかったのだ。疎遠になっていた忍天狗の旧知たちと再び関わることになれば、灯里や煬介の存在は自ずと広まる。ただでさえ灯里は、既に忍天狗の連絡役と接触しているというのだ。

推測なのは、灯里がはつきりとそのことを幹久に告げたことはないからだ。しかし先の玄関で鉢合わせたときの反応から鑑みても、灯里は連絡役の顔を知っている。幹久を介さず灯里が“お務め”をしている。これは幹久の今までの努力の一部が水泡に帰したことを意味する。

また、幹久は懸念していた。灯里と煬介には武術を手ほどきしているが、到底それで人をあやめられるものではない。そのことを連絡役も把握しているはずだ。しかし万が一にも、人を殺さねばならぬような任務に灯里が巻き込まれれば。そして、振り返ちに遭うようなことがあれば。

幹久は殺人の技能を持っている。一子相伝のそれを孫に伝えるこ

ともできる。だがその行いはこずえの、そして今は亡き子らの父の願いに反する。一方で、既に子供らを一族の運命の渦中に引きずり込みつつある今、生き残るための術を授けねば彼らはどこかで命を落とすかもしれない。

親としての情念か、養育者としての理性か。

その狭間で、幹久は揺れていた。

「2-2/4」

前にもまして祖父は家に帰るのが遅くなっていた。街の女学校に進学した姉も、日が暮れかけてからでなければ村に戻ってこない。煬介は相変わらずいじめられていたが、年下の男の子たちとは遊べるようになっていた。煬介の優しい気質は幼いものにとって良いものに映ったらしい、農作業に忙しい村の女たちに、子守を頼まれることもしばしばだった。

「姉ちゃん、おせえなあ……」

腹をすかせながら、煬介は自宅の軒先でしゃがみこんでいた。もう夕闇すら西の山の向こうに消え去ろうとしている。空を見上げれば、瞬く星々と丸いお月様が浮かんでいた。

「じいちゃんも……腹減ったよー」

ぎゅるり、と腹の虫が鳴る。

それに、煬介はぎよっとして飛び上がった。今は、自分の腹が鳴ったわけではなかったからだ。

たしかここから、と板塀の向こうを覗くと、ぐったりとしゃがみこんでいる影を見つける。

「も、一歩も動けねえ……もうだめだ」

袴を着込んだ若い男が、板塀によりかかって土気色の顔をしている。煬介はぴょんと塀の上に乗ると、男の頭上から声をかける。

「兄ちゃん、どうしたんだい」

「わっ、びっくりした」

期待していた通りの反応が返ってきて、煬介は気を良くした。

「ここらじゃ見ねえ顔だな。よその人だろ？」

「人を訪ねてきたのだが、お留守のようですね……弱った。その人頼りだったもので、財布の中身もからっつけつなんだよ」

「だったら、おらんちで飯食っていきなよ」

ひらりと塀から飛び降りて、煬介は男の隣に立った。男の気色がやや良くなる。

「良いのかい？」

「うん、どうせもうすぐ姉ちゃんが帰って……あつ、噂をすりゃ姉ちゃんだ！」

大きく手を振る煬介に、歩いてきた灯里が応じてくれる。が、煬介の傍に見知らぬ男を見つけたらしい、その眉が曇った。

「なあに、その人」

「ここで行き倒れてたんだよ。腹減って動けないみたいなんだ。なんか食わせてやってよ、おいらもべこぺこだ」

灯里はまじまじと男を見た。農村にいない優男の風体の彼は、顔を赤くして愛想笑いを浮かべる。

「ま、いいわ。おあがんなさいな」

「ほ、本当ですか。ありがとうございます」

「大したおもてなしはできませんけどね。煬介、あんたも手伝うのよ」

「ちえつ、姉ちゃんの帰りが遅いんだよ」

「手伝いな」

「あでででつ」

耳を引つ張られ、煬介は悲鳴を上げた。

「鹿代宝治朗かたひまじろうさんね。ご立派なお名前」

「いや、名前負けもいいところですよ」

夕餉を済ませても、まだ幹久は帰ってこない。

ちやぶ台を片付けている灯里と宝治朗の会話を聞きながら、煬介は庭に降りた。よつと逆立ちをする。それを見て、宝治朗が感嘆の息をついた。

「煬介君は身軽だね、さつきも塀の上にひょいと登ったりなどして」「あつ、しいー！」

時すでに遅し、灯里の目じりが吊り上っている。

「あんだ、またそこらに登って。猿じゃあるまいし」

「へへ……でもよう、高いところで動くのは、逃げるのに役立つんだぜ」

「また苛められたの？ あきれた」

「だから、ちゃんと逃げたよ！」

姉弟のやりとりを、宝治朗は丸い目で見ていた。

そこに、幹久が帰ってくる。

「じいちゃんだ！」

「じいさま、お帰んなさい」

「誰か来とるのか？」

敷居を跨いだ幹久は、宝治朗と目を合わせて、あつと声を上げた。

「おまえ、宝治朗！」

「し、指南役！」

ばつと宝治朗は居住まいを正すと、畳に額をつけた。

「これは、指南役のお宅だったとは……天命でしょうか、お久しぶりにございます」

「うむ……」

複雑な表情をしながら、幹久は居間にかかる。場介と灯里は顔を見合わせていた。

「じいさま、お知り合い？」

「旧友の息子でな。……わしの弟子でもある」

「弟子って何の？」

「武芸に決まつとろう、おまえらの兄弟子のようなもんじゃ」

「指南役にはボロ雑巾になるまでお相手していただきました」

さわやかな笑みをほころばせ、再び宝治朗は額を擦りつけた。

「指南役のお子がたとはつゆ知らず、とんだご無礼を」

「これは孫じゃ。いいから顔を上げい、久しぶりに会うのにそんなに面を隠してはいかん」

「はい」

肅然と、宝治朗は顔を上げた。

曰く、宝治朗は幹久を訪ねてきたらしい。

何の用なのか、は煬介には聞かれなかった。本題に行く前に、夜も遅いからと寢間に行かされたからである。

「何でおいらだけ仲間はずれなのさ」

「あんたが大人の話を聞いてたつて、せんないでしょうが」

「でもお」

「しつこい、寝るっ」

ぴしゃりと灯里に襖を閉められ、煬介は頬を膨らませる。

なんだよ、宝治朗の兄ちゃんを見つけてやったのはおいらなのに。だが間もなく、夜のとばりは煬介を眠りに連れて行った。

宝治朗は忍天狗だ。幹久が忍天狗の道場に指南役として招かれたときの教え子の一人である。もう二十年近くも前の話で、宝治朗は当時、煬介と同じくらいの歳だった。それでも彼は幹久のことを覚えていた。

「よくここが分かったな」

「連絡役に教えられて。どうも、指南役がうちの隊に加わるとお聞きしたんです」

例の、無産政党の監視の件だろう。とすれば、宝治朗は支持者のふりをして内実を探るネズミ役のはずである。

「指南役は引退したと聞いていたんで意外でしたが、納得ですよ。お孫さんがいたなんて」

ちらりと灯里に目をやり、宝治朗は続ける。

「しかし指南役がいてくだされば百人力です。うちは若い者ばかりで、シャンと立つことも出来ない蛸みたいな連中ばかりですから」

忍天狗はあまり内情を話すことはよしとされない。それが仲間うちであってもである。ましてや作戦行動中の下忍が、連絡役として以外で己の隊を話すことなど許されない。

しかし幹久は宝治朗を窘めることなく、その話を聞いていた。それが今度の幹久の任務であるからである。

旧友の子であるうがかつての弟子であるうが、そこに情けは加えられない。

宝治朗は道場を持つ天狗の家系の子の生まれである。十分な学力と学費をもって帝国大学に進み卒業したものの、今は表の顔としての仕事は持たぬらしい。いわゆる高等遊民というものらしかった。

「ふらふらしているうちに、親父が激高しちまいましたね。性根を叩きなおして来いと……下忍の仕事を引き受けたわけですよ」

そして隊付の連絡役に、幹久が近くにいることを聞いたというわけだ。

「それでわしのところに来たのか。そりゃ、鹿代どのも憤慨されよう」

怒るところか呆れて、幹久は呻いた。当の宝治朗はへらへらしている。

「指南役、よろしければしばらく置いてはいただけませんか。勿論、指南役のお仕事の邪魔はいたしません」

幹久は思案する。あの抜け目ない連絡役がわざわざ寄越したということは、宝治朗を使えということだ。口の軽いこの男を間に立てれば、直接隊の者たちに会い触れることなく、監視を行うことが出来るだろう。あとはこの男に、幹久のことを黙らせておけばいい。

「ねえ、じいさま。宝治朗さん困ってるみたいだし、いいんじゃないかしら」

灯里が幹久の袖を引く。心なしか期待した孫娘の視線に複雑なものを抱きつつ、幹久は膝を打った。

「あい分かった、いいじやろう。ただし宝治朗、わしがここに住み家を構えること、孫たちのことは誰にも明かしてはならぬ。よいな」

「お約束しますとも、ありがとうございます！」

宝治朗はひれ伏した。どこまで信用できるか分からないが、使ってみるだけの価値はある。

幹久だけではない。忍天狗は身内の者に対する以外、悉く冷徹なのであった。

「2・3/4」

宝治朗は年の離れた兄のような存在であった。

煬介はこの頃になると、姉や祖父が薬師以外の何かを職としていくことに気づき始めている。幹久が己に教える忍び文字やその会話法、身体の鍛錬などが、他の子もおしなべて教わるものではないということを知っていた。だがそのことを指摘しようとも、幹久や灯里は、その一点でのみまるすぎがない。一方で、宝治朗は非常にとっつきやすかった。煬介は皮肉にも、宝治朗から、忍天狗という組織の存在を教わったのである。

「朱雀、白虎、玄武の順番に偉いのさ。玄武は大体が薬師や陰陽師、占い師で戦わない。白虎は武芸に秀でているが、それだけだ。朱雀はみな表の顔を持ちながら、裏で忍びとして活動しているのだよ」

「じゃあ、じいちゃんは玄武？」

「いや、狗堂は朱雀一族の家系だよ。俺の鹿代かたいもそうさ。基本的に四神それぞれの一族は、長の家系以外一族内にしか関わりがないからね」

宝治朗は庭の土に線を引いた。三つの円にそれぞれ朱雀、白虎、玄武の名を記し、朱雀の円の中にクドウ、カタイと記す。

「朱雀一門で、最も偉いのが焰村って家だ。四神はそれぞれかじらの家系をもつが、焰村は忍天狗全体を束ねる家で、いわば大頭おおかしらというわけだね」

三つの円をさらに大きな円で一括りにすると、宝治朗はそのてっぺんにホムラと書いた。

「知ってるかい、忍天狗は大昔、神様から授かった力を日本の大地にお返しするために存在する一族なのさ」

「うん、それはじいちゃんに聞いた」

誇らしげな宝治朗は、うんうんと頷いた。

「その力つてのを受け継いでいるのが、頭の家系かしらなのさ。力は全部で四つあり、四神それぞれが一つずつ継いでいる」

「それで、せいりゆうが力をひとつ無くしてしまったから、追放されたんでしょ。知ってるよ」

「焔介はそこで首を傾げた。」

「でも力なんて目に見えるものなの？ 念力みたいなもんかな？」

「なんでも、子どもの掌に収まるほどの球だそうだよ。俺も人聞きでしか知らないがね、当代様が呑み込んで、胃袋の中に入れておくんだそうさ。そうして亡くなったあとに身体を焼いて、焼け残った球を次代様が呑む……という形で継いでいくらしい」

「うへ、気持ち悪いなあ」

「昔は目ン玉代わりに使ったりもしたそうだがなあ、呑み込むのが一番確実なんだろうよ」

「そんなものが果たして力というのだろうか。ただ“力”という名の虚飾であるような気もする。忍天狗であるはずの祖父も姉も、そして宝治朗も、焔介にとっては妖術を使ったりしない、普通の人間なのだ。」

「まあ、俺たち下忍の家は生まれながらに下つ端なのだから、無関係なのだがね。一応、焰村様をお守りするのも使命の一つなのだよ」

「知ってるよ、おいらも天狗の訓練を受けてんだもの」

「おお、さすが指南役のお孫さまだ。賢くていらっしやる」

「おどけたように畏まって言う宝治朗に、焔介は尋ねた。」

「ねえ、宝治朗の兄ちゃんは、じいちゃんにどうという武芸を習ったの？」

「うん……指南役こと幹久どのは、体術の武芸者なのさ。白虎の武芸、玄武の知識、そして朱雀の技術を兼ね持ったお方だから、御引退されるまで朱雀の当代様には重宝されていたんだが」

「ちらと宝治朗は背後を見た。まだ夕暮れどきだから、幹久が帰ってくる気配はかけらもない。」

「こんなところに閑居されているとは、どうという風の吹き回

しなのか……まあ、そのおかげで俺は助かったのだけれどね」
顔をほころばせる宝治朗は、煬介の目にすら呑気だなあと映ったのである。

「薬、薬はいらんかね」

「おい、じいさん！」

立ち止まっていた店の中から、洋装の店主が出てきて怒鳴った。

「見て分かんねえか、ここは薬局だよ！　こんなところで薬なんか売るんじゃない」

「あれま」

目をぱちくりとして、弱弱しい老爺は頭を下げた。

「これは済まなかったね」

「まったく、営業妨害もいいところだ。余所行っておくんな」

薬売りは薬箱をよろよろと持ち上げ、再び道を行脚し始めた。夏も近づき暑さがじりじりと堪える。目深に被った傘を押し上げる。

「火に入る虫の言伝に」

ふと落ちた声に、薬売りの目つきが変わる。

「……何用じゃ」

「いえ、首尾はいかがです」

声はすれども、相変わらず姿はない。周りを見るわけでもなく、薬売りは歩みを進めながら答えた。その足運びに隙はない。

「鹿代の若造をよこしたのはおまえか」

「ええ。鹿代はああ見えて頭の切れる男です。ゆめゆめ油断なさらぬよう」

その言葉に、薬売り　　幹久は立ち止まる。

「やはり、そうか」

「そう、とは？」

「若衆の監視とは名ばかり。本当は既に、彼らの心は傾ききっているのではあるまいか？　共産主義とやらに」

「……鋭いですね」

幹久はため息をつき、再び歩き始めた。

「彼奴はわしを仲間に取り込まんとするじゃろつな」

「そうですね。しかし、彼らが本来無産政党的支持者の監視役として任についたのは本当ですよ。裏切り者の指揮は鹿代が執っています」

なるほど、ネズミとして取り入ったはずが、本当に支持者になつてしまったということだ。

しかしまともに忍天狗の務めを果たしている者もおろつ。おそろくそれが、こつそり密告したのだ。

「下忍とはいえこつさもあつさり裏切り者を出してしまつては、示しがつきませんし一族の恥です。裏切りの決定的になつた暁には、狗堂どのに“処分”をお願いしたい」

「密告者はどうした？」

「彼は殺されました。一足先に、粛清にあつて」

幹久は顔を歪める。

「……密告者を粛清したのか、かしらは」

「密告者といえど裏切り者一派と寝食を共にした仲、寝返らぬとは限りませんからね」

「それは当代様の方針か？ いくらなんでも、無体な」

「いいえ、次代様のご命令です。このたびの任は、次代様が指揮を執られておりますので」

幹久はより顔つきを険しくした。次代様、すなわち巨影である。

「それにしても、先に裏切り者を処罰する方がさきであろつ。順序が違う」

「ですから、裏切りの明らかな証拠はまだないのです。彼らは共産主義を支持する側に回つたということしかありませんし……鹿代家は朱雀天狗の下忍の中でも、道場を持つているがために下忍からの支持が厚いのです。おいそれと処分するわけにはいきません」

それでも納得がいかず、幹久は厳しい顔を崩さない。

「……最近の御山の様子はいかがじゃ」

葉隠山、ひいては朱雀亭のことをさして尋ねるが、連絡役の声は淡々と応じる。

「私はただのカラスです。朱雀の内実までは」

「朱雀亭で働く娘から手紙が途絶えた。御山で、何か起こったのではないか？」

街の端まで来た幹久は、振り返った。

「このところのお務めにしてもそうじゃ。……わしは納得いかぬ」

「ではお孫たちはいかがします」

切り札のように持ち出す声に、幹久はある家の軒上を睨んだ。

「おぬしは知らぬかもしれぬが、焰村家にとつてもあの子らはあつ

さりと失えぬものよ　わしは一度葉隠山に行こう。当代様に直にお聞きしたいこともある」

「務めはどうされるのです？」

「灯里がおろう。わしがおらぬとなれば、鹿代は孫を引き入れようとするかもしれぬ。泳がせるにはいい機会じゃ」

姿なき声は小さく笑った。

「お孫さままで利用召されるか。さすが、稀代の鬼天狗と呼ばれただけはある」

「何か変わりがあれば知らせよ。わしはこのまま発つ」

踵を返し、幹久は伏雁村の方に向かって歩き出した。

「2-4/4」

十年ぶりに訪れた葉隠山はがくれやまは、変わりなく青々と葉を茂らせていた。幹久は足を運ぶたび思うが、ここは本当に時代の流れを感じさせない。いつまでも同じ姿のまま、住む人だけが移り変わっていく。そんな世界だ。

連絡役を仲介に、正式なものとして実現した朱雀亭への訪問だが、幹久は腹の底に緊張感を据えて一步を踏み進めていた。焰村家ほむらとつて、幹久は長子の子を誘拐した大罪人のはずだからである。

奥の間に通されてからも、それは変わらない。

やがて現れたのは旦影あさかげであった。直接の対決というわけか、その精悍な顔には不遜な笑みが浮かんでいる。

「次代様、しばらくぶりにございます」

「どの面を下げてここに戻ってきた、幹久よ」

正面に座した旦影に、幹久は頭を低くした。

「はっ……田舎にて閑居しております」

「そういえば、おまえが干晴の子を誘拐し養っているという証拠はないのだったな」

思い出したように旦影が言う。

そう、真実は如何にせよ、幹久が同居する灯里と煬介が、焰村干晴の子息という証は何一つない。焰村がそれを追求せぬ代わりに、幹久は狗堂の名を継ぐ忍天狗として孫の教育を行う。密約の下、互いに紙一重で進んできた十年である。

「して、用向きは何じゃ？」

「畏れながら次代様、当代様へのご相談にございます」

暗に当代 焰村干影との謁見を申し出たのだが、旦影はかぶり振った。

「父上は病床じゃ。わしが聞こう」

「臥せつておられるのか」

これには幹久も驚く。

旦影は一笑に付した。

「大方、アカの若造どもに焚きつけられて来たのだらう？ 愚かな。忍びに思想は要らぬというのに」

やはり、共産主義に染まった忍びの若者たちの弾圧を命じたのは旦影なのだ。幹久はそれに反論する。

「しかし、罪なき者まで肅清をされたのは次代様でしょう。流れを押さえつけると氾濫が起こりましょう、これはその兆候ではございませんかな」

「……おまえは明治の改革を生きた世代か。なら、分からぬだろうな」

ため息をつき、旦影は身を乗り出した。

「倒幕に手を貸し、新しい政府を立ち上げること尽力したおまえたちが、この下忍たちの自我の目覚めに、革命の火の燦りを見出せんはずがないだろう。社会主義は露西亞を目覚めさせ共産主義を生んだが、我が国にもその思想は流れている 力無き層、労働者に。だが今度の革命は成功してはならぬ。何故なら力とは持つべきものに委ねられねばならぬものだからだ」

「力あるものと共に戦った、我らの時世とは違う……ということですかな」

「そうだ。力の転覆は混乱と破壊を招く。壇上にあるものを全て叩き割るのと同義じゃ。それは避けねばならぬ」

「しかし、下層の者たちがみな、力なきものとは限りませぬぞ」

「おまえのようにか？」

幹久はかぶりを振った。

「わしはもはや去るのみの老兵でございます」

旦影はそれを、せせら笑った。

「忍天狗に個は要らぬ。自我に目覚めたものは処分せよ。それが、焰村の結論じゃ」

「……左様でございますか」

「これは当代様にもご理解頂けたこと。おまえがもし不平を漏らすなら、幹久、ぬしもまた忍びの本分を失うたことになるぞ」

幹久はひれ伏した。

「滅相もございません」

「では、行け。務めを果たせ。わしが言うことはそれだけじゃ」

幹久は操られるがごとく立ち上がると、のろのろと場を辞した。

完全な敗北だった。幹久は葉隠山を訪れたことを深く、後悔しながら山を下りた。

もはや忍天狗の全権は旦影にあるのだ。景色は変わらずともそこに住む人はうつろうのだと思ひ知る。幹久は既に老兵として去るのみなのだろつ。

自らの老いを痛感する。

革命を行う気概など残されていない。

重い足取りで家路を行く。長屋まで辿り着いた幹久を迎えたのは歌声だった。

とおoryゃんせ、とおoryゃんせ。

ここはどここの細道じゃ。

天神様の細道じゃ。

ちつと通して、下しゃんせ。

御用のないもの、とおしゃせん……

「あつ、じいさまー！」

幹久に気づいた灯里が、ぱつと顔を赤らめた。止まった歌声に、近くにいた長屋の子供達が幹久を見る。警戒心の浮いた目だった。

「子守か。……灯里、宝治朗はおるか」

「宝治朗さんなら、そこ」

宝治朗は軒先に立っていた。背をしゃんと伸ばし、まるで立ち合

いに臨むかのような面持ちは、夢から覚めたかのような真剣みを帯びている。

「御山はいかがでしたか」

やはり、気づいていたか。

当然ながら幹久は、どこに出かけるかは灯里たちにも告げていない。

「受け入れられなかったよ」

告げると、宝治朗は唇を噛んだ。

「そう、ですか……」

「もう良いか、わらべたち。わしは家に入りたいのじゃ」

「ほらほら、今日はおしまい。みんなお帰り」

灯里の言葉に従って、子どもたちはばらばらと散っていく。灯里は幹久を振り返った。

「じいさま、煬介はまだ帰ってないよ」

幹久は面食らったが、孫娘の真っ直ぐな目に、その言葉を理解した。

「そうか、なら都合良いな」

天狗の話をするのには、である。

話し合いでは、結論は出なかった。

何度も諦める、と幹久は告げた。思想を捨て個を捨て、一族の一部として生きよと。宝治朗は応じなかった。一度目覚めた自我は、そう易々とは失えるものではないのだ。

煬介が帰り、就寝し、不安がる灯里を無理に寝かせたあとの深夜、幹久と宝治朗はひっそりと家を出た。

口で決着がつかぬ以上、幹久は務めを果たさねばならない。

宝治朗もそれに応じた。灯里や煬介に己の思想を明かさなかったらしい、彼は仁義を尽くしていた。それを、幹久は殺さねばならぬ。何が正しくて、何が歪んでいるのか。

それを考えるのはままならぬ。幹久は個を捨て、使命に従順する

ことを決めたからだ。

月光の下、二人は向かい合う。

初めに動いたのは宝治朗だった。打刀が閃く。脇を狙って突き出されたそれを半身で避け、向かってくる腕を取る。肩口を当て、投げようとした矢先、宝治朗は自らひらりと舞った。距離が開く。

攻め込んでくるくせに、型がない。骨のない動きは掴みにくく、崩しにくい。

宝治朗が握る刀がさらに、幹久の当身を妨げる。技を入れる隙も受ける隙もない。一対一でこれほど戦いにくい相手は珍しい。

だが、踏んだ場数の多さが雌雄を決した。

宝治朗は幹久の誘いにのった。体を低くしてぶつかるときの体勢を崩すと、幹久は中段を抜くように、宝治朗を押し倒した。刀を奪い、組み伏せる。

首筋に滑らせるはずだったその刃を、しかし、幹久は躊躇った。

刹那、かっと目を見開いた宝治朗は緩んだ戒めから抜け、間合いを開ける。

「情けを……かけられたと思って良いのですか」

「いや……」

殺すことを躊躇ったわけではない。手が、動くのを拒んだ。汗ばむ体は限界を訴えていた。

死線を潜るためにはいくらか、この身体は年を取り過ぎている。

しかし宝治朗は、極められていた左腕をさすると、険しい顔で言った。

「逆の立場になりましたね」

幹久は、奪い取った打刀を投げ捨てた。

「武器は使わぬ、来い」

それを侮辱ととったか、挑発ととったのか。宝治朗は気合を上げながら向かってきた。構えをとり、幹久はその身体を絡めとる。だが投げようとしたとき、掴んだ腕を逆さに取られた。

しまった

返し技をかける間もない。勘が鈍るとはこのことを言うのだ。首を極める体勢に宝治朗が入る。幹久は抵抗しようにも、指一本自由に動かせなかった。

「大恩ある身、この場は退きましよう」

「宝……治、朗」

意識が遠のく。崩れ落ちる寸前の幹久に、宝治朗は告げた。

「ご隠居召されよ。あなたがたの時世は過ぎたのだ」

「じいさま、あたし、一人前の忍天狗になったから」

ついにか、と幹久は頭をがつんとやられた気分だった。

宝治朗に敗れた夜明け、長屋に帰った幹久を、灯里が出迎えた。

孫娘は汗と土にまみれた幹久に何も言わず茶を出すと、その正面に座してそう言ったのだった。

灯里は一本気を表した真っ直ぐな目で、祖父を見据えている。

「あたしは狗堂のお家を継ぐつもりだよ。じいさま、賛成しておくね」

「灯里よ、おまえ、先生になりたいのではなかったのか」

「先生にはなるよ。そのためのお金も援助してくれるんだろ、天狗になれば」

正座した膝を掴む手に力を入れ、灯里は続けた。

「じいさま、宝治朗さんは殺さなかったんだろう。宝治朗さん、発つ前に挨拶しに来たから」

正確に言えば殺せなかった、だが。押し黙る幹久に、灯里は気丈に振る舞う。

「だからさ、じいさまは晴れて、御隠居になったんだよ。もうお務めも何もない、これからはあたしが……何とかするからさ、だから」

「灯里……」

あのとき、何故手を緩めたのか。

老いは言い訳になるか、否か。そもそも立ち会いを挑んだことが間違いだっただ。不意を取ってしまえば、あっさり殺められたも

のを。

そのせいで失ったものは大きい。

悔恨の念が、幹久を揺さぶる。

「すまぬ」

それだけ言うのが、精一杯であった。

「3-1/1」

新しい年が来る直前に、狗堂一家は引越しをした。

煬介にとつては初めての引越しであった。といつても幾里もいかぬ、伏雁村の端つこの山裾が新しい住処であったが、住み慣れた長屋を出たばかりの煬介には、何もかも新鮮で眠れなかった。

それが、悪い夢を引き寄せたのかもしれない。

気づけば煬介は、家の裏の畑に立っていた。月光がわずかに射す、九分の闇の底、鍛えられた忍びの目に映るものがある。

それは、天狗の面であった。

闇に浮かんでいるように見えたが、それは誤りで、天狗の面をつけた誰かが正面に佇んでいるのだった。天狗の面の耳上には小さなとんがりがあり、まるでそれが般若のようにも、鬼のようにも見えたのだった。

鬼天狗ともいうべきか、そいつはこう叫んだ。

「これからおまえに、技を授ける」

朗々と響き渡る声に、煬介は目を擦った。

「わ、技？」

「そうだ。死にたくなければ、それを覚えよ」

天狗は素手であった。音もなく煬介に忍び寄り掴みかかると、突然投げつける。

地面の上に強かに体を打ちつけた煬介は、襲う痛みに咳き込んだ。「なっ……」

夢ではない。

鬼天狗は煬介の胸倉を掴むと、持ち上げ、立たせた。突き飛ばす。

「な、何すんだっ」

抗議の声を上げる煬介を、鬼天狗はまたも容赦なく肩に担ぎ上げ、投げた。

畑の土はけして柔らかくはない。咳き込む焔介に、また天狗は迫ってくる。

「受け身を取らねば、死ぬぞ」
投げられ続ければ、いずれ立ち上がる力も失せるだろう。

次に投げられたとき、焔介はとっさに空中で身をひねり、ようやく足で着地した。動転していた気も静まり、落ち着いてきた頭で、何度も投げられ、受け身を取りながら、考える。

体格差はあまりない。逃げるだけなら可能かもしれない……
そう考えた瞬間、足を払われる。

「うわっ」

正確に言えば、足は、掬われた形で開いたままだった。体勢を整えようにも、変な姿勢で固定されているせいで体重が戻せない。なすべなく、焔介は顎から地面に着地した。

「走る前に動作を見せるな。それと、逃げようとするでないぞ」

鬼天狗は軽く、家の方向をしゃくった。

焔介は戦慄する。あの家には、祖父と姉が寝ているのだ。

「何しようってんだ！」

思わず叫んで掴みかかるが、簡単に絡め取られ、倒される。

「いてえ！」

倒される瞬間肘を打たれたのだ。馬乗りになった鬼天狗の、指が目を突きに来る。必死に首を動かして避け、その際わずかに空いた隙間を使い、焔介は天狗の身体の下から抜け出すことに成功した。

天狗と距離を取り、向き合う。

……延々とそんなことをしているうちに、焔介はやがて疲れ果てて意識を失ってしまった。

翌朝目覚めると、焔介はうちの、布団の中にきちんといた。

「すぐさま昨晚のことを姉に訴えたが、「あんだ、ずっと布団の中にいたわよ」と言われてしまった。しかし体中が痛むのは明らかで、歩くどころか立ち上がるのにも苦勞するほどだ。」

あの鬼天狗は一体何だったのだろう。

しかし疑問に思う間もなく、そんな晩は毎晩のようにやってきた。突如畑に現れる鬼天狗に、痛めつけられる夢。しかし着実に、体には傷痕だけが刻まれていく。このままいけば殺されるのではないか。恐怖が焔介を襲う。だが姉や祖父はそれを夢の出来事だと否定するばかりだった。

いつしか焔介は家の中で、無口になっていった。焔介は尋常小学校も後半を迎えた少年期、すなわち思春期に入っていたのである。その頃、村には一つの問題が大きくなっていった。先の大地震。関東大震災の折に親を亡くし、孤児となった子供たちのことである。

彼らは浮浪児としてのコミュニティを作り上げ生活していた。それが余所の街からも集まりだし、徐々に大きくなりだしたのである。食いつ持が増えれば、施しや靴磨きだけで生きていけるはずもない。伏雁村はこの年は不作で、生命線である施しすら減りつつあった。少年たちはついに、盗みを働き始めたのだった。

震災より月日が経ち、少年たちは成長しより大人に近づきつつある。日増しに荒々しくなっていく彼らを、伏雁村の住民たちは持て余していた。

しかし、この頃焔介は、浮浪児たちと交流があった。川に落ちた彼らの年少者を助けたことがきっかけで、知りあうようになったのである。そのせいで級友からは余計にのけ者にされるようになったが、苛められることは減った。浮浪児たちが守ってくれたからであった。

浮浪児たちとの付き合いに、幹久や灯里は良い顔をしなかった。村のつまはじき者と仲良くするということは、村八分にされてもいいという意味表示であった。不作の名残は今年にも及び、山の幸である薬草も少なくもともと裕福でない狗堂家は困窮していたが、村八分は助け合いの輪からすら弾き出されるということなのだ。

しかし焔介にはそんなこともどうだって良かった。浮浪児の集ま

りは、紫がいなくなって初めて出来た、心から安らげる友人だったからだ。

「煬介、畑を」

幹久に皆まで言わせることなく、荷を置いた煬介は家を飛び出していってしまう。

ため息をついた祖父に、家の中で縫物をしていた灯里が呼びかける。

「無駄よ、じいさま。言うことなんて一つも聞きやしない」

「困ったもんだな……」

灯里の思春期にも散々悩まされたものだが、大人しかった煬介の方が難儀だったとは。

胡坐をかいた幹久に、灯里は続けた。

「それはそうと、京都学連のこと、お話ししましたっけ？」

学連 学生連合会とは、社会主義を研究する大学生団体の全国組織のことである。京都学連事件とは、去年度から今年にかけて治安維持法の下に、学連の会員学生たちが多数検挙された事件であった。

「ああ……宝治朗は結局捕まらなかったのか？」

「あの件で、例のネズミの裏切り者たちについては、忍天狗との連絡を絶ちました」

それは今まで暗に見過ごされていた裏切りを、自ら明かしたことになる。いよいよ忍天狗の追及は厳しくなるであろう。

“処分”が始まるのである。

「愚かなことをしたものよ」

「狗堂の家にも監視がつくやもしれませぬ」

幹久は宝治朗を匿い、その後取り逃がした経歴がある。

「じいさま、煬介はどうしましょう」

煬介は、忍天狗の連絡役からも逃げ回っているらしい。本当に逃げ足だけは一丁前だ。幹久は呆れとも感嘆ともつかぬため息をつい

た。

「あれも雛とはいえ天狗の子じゃ。折を見てわしから話をしよう」

「承知しました。……ところでじいさま、煬介につけている稽古のことですけれども」

咳払いして話題を変えた灯里に、幹久は眉を上げる。

「鬼天狗か」

「そうです。あの稽古、一体何の意味が？」

普段の武芸稽古とは違うのか、という問いかけだろう。武芸稽古なら灯里にもつけているが、夜半の鬼天狗の稽古の内容を灯里は知らぬ。

幹久は囲炉裏の火に目をそらした。

「意味のあることよ。……煬介にはの」

「私には意味のないことで？」

灯里はずいとならぬ。

「狗堂の家を継ぐのは私です。煬介に教えることなら、私を先にしてください」

「あれは一子相伝じゃ。おまえには伝えぬ」

灯里は傷ついたように目を見開いた。

しかしきつと眦をつりあげると、きつい口調になった。

「じいさま、厳しい修業は煬介にはまだ早すぎるわ」

「わしももう生い先短い身じゃ。今のうちに、おまえたちに来ることはしてやらねばならぬ。あれを受け継ぐ者をおまえではなく煬介に選んだのも、わしの思うところあつてのことじゃ」

「私には資格はないの？ 女だから？」

「そうじゃ」

断言した幹久に、灯里はぐうの音も出さず黙り込む。

幹久は低い声音で、呟くように告げた。

「灯里、おまえは己の役目を果たせ」

灯里は何も言わなかった。

「4-1/3」

家に明かりがついている。姉は帰っているらしい。

なるべく音のせぬようそろそろと戸を開けたのだが、気づかれてしまった。

「おかえり、よう」

黙っていると、叱声が飛んできた。

「ただいまくらい言いなさいな！」

それでも無言で居間の灯里あかりの傍を通り過ぎようとすると、姉はさつと白い封筒を持ち上げた。煬介は思わずあつと声を上げる。

「紫ちゃんからの手紙、預かってるんだけど、いいの？」

「ちよ、よこせよ！」

伸ばした煬介の手を、灯里はひらりと避ける。意地悪い笑みがその顔に浮かんだ。

「かれこれ四年にもなるのに、よく続いてたね、文通」

あまりにひらひらと灯里が避けるので、煬介はしかめっ面で立ち止まった。こうやってからかわれるのがいやで、このしばらくは紫ゆかりとの手紙のやり取りも郵便局留めにしていたというのに。きつと、気の良い局員のおじさんが、親切心で灯里に頼んでしまったのだらう。

「いいから渡せって」

「んまあ、そんな口をきいていいの？」

手紙は未だ灯里の手の中にある。ぐうの音も出ない煬介に、姉は気を良くした様子だ。

空いている方の手で自分の鼻を摘まんで、灯里は舌を出した。

「くっさいよ、煬介。もうじきじいさまも帰ってくるころだし、風呂の準備して頂戴」

臭いと言われて、煬介は露骨に顔を歪める。浮浪児たちと遊んだ

帰りだからだ。友達を貶められた気がして、煬介はむきになって反論した。

「くさくなんてないや、くさいって言う方がくさいんだい」

「何だい、その理屈」

「いいからそれ、渡せよ！」

囲炉裏を跳び越え、躍りかかった煬介に、灯里はよほど驚いたのか悲鳴を上げながら倒れこむ。火にかかっていた鍋を煬介の裸足が蹴飛ばす、熱かったがそれより必死に、もみ合いながら二人は手紙を奪い合う。灯里も半ばむきになっているようだった。

「何をやつとる！」

そこに、一喝が響いた。

ぴたりと動きを止め、次の瞬間には素早く、姉弟は居住まいを正した。玄関から現れたのは祖父、幹久である。その顔は険しい。視線の先には飛び散った味噌汁と、板の間の惨状がある。

「何を暴れておった？」

「それは……その……」

「姉ちゃんがおれに意地悪しました」

歯切れ悪い灯里の一方で、煬介はしゃんと背を伸ばして言った。

姉は反論する。

「あなたが急に跳びかかってきたのが悪いんでしょ！」

「姉ちゃんがとつとと手紙を渡してりゃ、なかつたことだろ！」

「何をう！？ 誰が夕飯の支度したと思っただこのガキ！」

「知るか！ つかしい加減手紙よこせよタコ！」

「黙らんか！」

再び取っ組み合いを始めそうだった二人は、びりびりと震える空気に蹴落とされ、動けなくなった。幹久は姉弟の脳天に拳骨を落とすと、二人に命じた。

「灯里は夕餉のし直し、煬介は風呂の支度をしてこい！ その間、

一切喋るな！」

「は、はいっ」

「はい……」

目はちかちかしていたが、煬介も灯里もすぐさま立ち上がり、各々の仕事に散っていった。

いい塩梅に湯気が立っている。

「じいちゃん、もう入れるよ」

「おお、そうか」

行水を済ませた幹久が風呂桶に全身を浸からせる。煬介はその傍にある炉に薪を足しながら、火加減を見ていた。

「極楽、極楽」

機嫌は直つたらしい。顔をほころばせる祖父の様子をちらと窺つてから、煬介は口を開いた。

「……なあ、じいちゃん」

「うん？」

「おいら、くさい？」

祖父は少し怪訝な顔をしたが、答えた。

「いんや」

「そうか」

煬介は胸を撫で下ろした。が、それだけで済むはずがない。

「何じゃ、灯里にまたいらんことを言われたか」

さすがは鋭い。湯気の中から響いた幹久の声に、煬介は答えあぐねていた。

「……煬介よ、別にわしも姉ちゃんも、おまえの友達を否定するつもりはないぞ」

「……うん」

返事せぬうちにゆっくり続いた言葉に、煬介は頷いた。幸男にフサに祐作……泥だらけの真つ黒だが、さんと輝く笑顔が浮かぶ。親や家がなくとも、みんな大事な友達だ。

「ただなあ、おまえの姉ちゃんは女学校に行っておるだろ。その学友がな、おまえとおまえの友達についてからかったりするんだそう

だ

場介は俯いた。幹久は滔々と続ける。

「まあ、灯里は大人しく苛められるようなタチじゃなからう、それでまた学校で暴れたりするもんだから、あのお転婆が……なんだ、先生にこっぴどく叱られたようでの。わしらに言うことはないが、さしもの灯里も少しばかり気が滅入っておるようなんじやよ」

「えっ」

ぱつと顔を上げた場介は、風呂桶の中から見下ろす幹久と目があつた。祖父の顔を見てきちんと喋るなんて、いつぶりだろう。幹久の目は穏やかだった。

「おまえ、昔からよく灯里にからかわれておつたが、酷いことを言われたことはそうそうなから」

「うん……」

「弱つた時にはな、人間誰しも刺々しくなってしまうもんなんじや。心配せんでも、姉ちゃんはおまえの味方だよ。女学校で暴れたのだから、弟と友達を侮辱されたことで怒つたからだ、先生はきちんと理解して下すってたんでな」

灯里はこの春から推薦を受けて、都会の女子師範学校に行くことになっている。

寮生活になるのだ。住み慣れた村を出、家族と離ればなれになる不安だつて、あるに違いない。

それを考えると、場介は急に、灯里に悪いことをしたような気になつてきた。

幹久はそれを見透かしたように、にいと笑う。

「夕餉を台無しにしちまったことくらいは、謝った方がいいわな」
「そうする」

肅として、場介は頷いた。

姉ちゃんでも、落ち込むことがあるのか。

そんな当たり前のことを、場介は今知った気分だった。姉の学校

の話だつて知らなかった。最近家族とあまり会話をしていないと思つていたが、そんなことさえ気づかない自分が少し、情けない。

「ねえちゃん」

居間に戻ると、姉はこちらに丸めた背を向けて座っていた。

呼びかけても応じない。むしろ、近づくとつれしやくりあげているように見える背中に、煬介は不安になった。泣いているのだろうか？

灯里の肩に手を伸ばす。

「ねえちゃ

」

「わっ！」

触れた瞬間、がばつと振り返つた灯里に、煬介は悲鳴を上げてひっくり返つた。それを見て、姉は爆笑する。

「びっくりした？」

「っにすんだよ、もう……」

「ごめんごめん」

にっこり笑う姉は、いつもの灯里だ。そう思うと言葉はすんなりと出てきた。

「姉ちゃん、ごめんな。晩飯……」

「ん？ ……まあ、具のお野菜にはごめんなさいだけど、すぐ作り直せるもんだからいいさ。まあ、あたしも悪かったし……ごめんね」

はい、と灯里は紫の手紙を差し出してきた。受け取るとすぐ封を切る。

「紫ちゃん、お元気？」

「うん……父ちゃんの仕事で転々としてたけど、帝都に戻ったらしいや」

「ふうん。なあ、どうせ返事書くんでしょ？ あたしのことも書いてよ」

「なんて書く？ “ますます背が伸びて、山猿のように立派になつております”」

「よっっ」

「ふっへへ」

じゃれついていたところに、湯上りの祖父がやってくる。

「何じゃ、また喧嘩しとるんか」

口調も表情も呆れの色しかない。

姉弟は顔を見合わせて、笑った。

4・1927 フォークロア・前「2/3」

「4-2/3」

友達のねぐらを借りて、薄暗い中煬介は文面に何度も目を通す。そのうちに、入り口のすだれがしびれを切らせたように上がった。

「ようちゃん、まだかよ」

「あ、あとちよっと」

覗いてきたのは、ねぐらの持ち主の幸男だった。靴磨きの油で汚れた指で鼻先を擦ると、不思議そうに首をひねる。

「薄暗えことがないなら、手紙くらい堂々と読めばいいのに」

「そついう問題じゃないんだよ」

とにかく一人にしてくれ、と煬介はすだれを引つ張り提げる。

ところが数分も立たないうちに、再びすだれは上げられて、煬介は引きずり出されてしまった。

「よ、よ、ヨースケ、いい加減に遊ぼうぜ」

首根っこを掴んでいたのは、このコミュニティで一番体の大きな少年、祐作だった。こんななりをして臆病な彼は眉を下げしており、乱暴な真似をした原因である隣の少女を見下ろした。

元々ツリ目の眦をさらにつり上げ、少女　フサは、ゆっくり地面に下ろされた煬介の手元を指さす。

「それ、誰からの手紙さ？」

「誰からだつておいらの勝手だろ」

「へえ、あたいらには言えないつてのかい。あたいらのねぐらを借りて読みふけてたわりにはよう」

けつ、と女の子のくせに唾を吐くふりなんかしたフサに、傍にいた幸男が齒の抜けた口を開けて笑う。

「フサのやつ、ヤキモチやいてんだ」

「や、や、やきもち？」

フサにきつと覗みつけられ、幸男と祐作は黙り込む。

「とにかく、見せてみな」

「やだよ！」

「あたいだって文字ぐらい読めるもん！」

「そういうこと言ってんじゃないや、人のモン見るのはよくないんだぜ」

場介が言うと、幸男と祐作がうんうん頷く。それに、フサは再び忌々しそうに顔をしかめた。どんどん耳が赤くなっていく。

フサが本気で腹を立てると、大泣きするのを知っている場介は、面倒くさいことになる前に白状することにした。

「……おめえらがここに来る前に引越しまつた、おいらの友達からの手紙だよ」

「よ、よ、ヨースケの、ともだち？」

「女の子か？」

興味津々というように幸男が尋ねてくる。場介は首肯した。すると、矢継ぎ早に質問が飛んでくる。

「どこに住んでんだ？」

「と、東京」

「な、な、名前は？」

「紫ゆかりだよ」

「どんな子なんだよ？」

「えーっと……」

場介はちらりと、黙りこくったフサの様子を窺った。

フサは半目で場介たちのやり取りを見ていたが、彼の視線に気づくと、ふいとよそを向いてしまった。場介はそれに半笑いを浮かべると、空を見上げる。いつの間になら、夕暮れだ。

「あ、もう日暮れだ。おいら帰らねえと」

「ええー、今日はほとんど遊んでねえじゃねえか」

幸男と祐作が残念無念と叫ぶ。

男の子たちがこつも場介に執着するのは、こつ見えて場介は取っ組み合いになると強かったからだ。浮浪児にもコミュニケーションがそれ

それあつて、縄張りもある。そのコミュニケーション間のもめごとを解決するに最も手っ取り早いすべは、喧嘩だった。

喧嘩に強いものは群れのかしらになる。それは、動物の世界でも子供たちの世界でも一緒だった。フサたちのコミュニケーションは幼いものが多く、年長者の多いコミュニケーションには太刀打ちできない。そこで、仲良くなつた煬介が使う武芸技は、ひどく心強いものにつつたのだ。

無論煬介も、よそで技は使わないようにときつく祖父らに言われているために、よほどの有事でなければ武芸を振るうことはない。それに、夜半訪れる鬼天狗に仕込まれた技はなんだか恐ろしい気がして、まだ誰にも使っていないのだ。普通の喧嘩なら、年齢の割に体の小さな煬介がいくら武芸を習っていても負けることはある、それでも、弱小であつたフサらのコミュニケーションの立場が少しばかり見直されつつあるので、煬介は嬉しく思っていた。

「悪いな、また、明日！」

「おう、気を付けて帰れよ」

「ま、ま、またな」

手を振る幸男と祐作に一呼吸遅れて、仏頂面のフサが口を開いた。「……明日はもうちょっと、その紫つて子のこと、詳しく聞かせなさいよ」

煬介は苦笑いでこくこくと頷くと、その場を後にした。

こうまで緊張した面持ちの祖父を見るのは、灯里は初めてだった。祖父と、差し合う客の男に茶を置く。幹久の隣に灯里が座すと、客の男は深々と彼女に頭を下げた。まるで、主君にするかのよう。

「灯里様、お久しぶりでございますな」

「兎丸とまるどの」

幹久の鋭い声に、客の男　　兎丸という名らしい　　は面を上げる。左右不釣り合いな顔に、伸ばしきらない曲がつた背筋が特

徹的な男だ。既に歳は知命を越えているだろう、だが、表情には力が満ち満ちている。

「こちらは兎丸銀二どのじゃ。して、今日は何用じゃ。連絡役も通さずに」

連絡役、と祖父が口にした単語に、灯里は息を呑む。では、この銀二という男も、忍天狗なのだ。

当の銀二はじっと灯里を見つめていたが、やがて重々しく平たい唇を開いた。

「当代様のご危篤でございます」

幹久は渋面を作った。

恭しい口調のまま、銀二は続けた。

「最後に、一目だけでもお孫様にお会いしたいと仰せ」
「断る」

はっと灯里は幹久を見た。祖父の横顔に、隠そうともせぬ怒りにじみ出ている。

「今更、葉隠山に行って何になる。焰村は旦影あさかげどのが継ぐのじゃろう」

「当代様は、旦影さまの治世に不安を抱いておられます」

灯里には話が見えない。銀二は一体何を頼みに、祖父を訪れたのだろう？

幹久に訊こうにも、彼は痛みをこらえるように目を閉じ眉間に皺を寄せていた。

「忍天狗としての狗堂いぬどうはこの子らが継ぐ」

「それだけでは足らぬのじゃ。鬼天狗の狗堂、始末役目の使命を忘れたわけではなからう」

「お、お待ちください」

思わず、灯里は口論を割った。

幹久が驚いたように彼女を見るが、気にせぬふりをして灯里は続ける。

「始末役目とは何でしょうか。わたくしの使命は監視役でございますま

す

「……おまえさまも、おなごであるからな」

銀二はゆるゆると息をつく。

「始末役は、裏切りに凶手を振るうお役目じゃ。狗堂は代々そのお務めを担ってきた忍天狗の名家」

灯里は声も出せなかつた。

その間に、苦しげに幹久が言葉を紡ぐ。

「……後生じゃ、これ以上わしらを巻き込まんでくれ。娘のときは、一切が許されたではないか」

「娘御はおなご。幹久どのの貢献に報いて、技を継がせずに済んだだけじゃ。当代様の頼みを聞き入れ、娘御を輿入れさせるときに覚悟はあつたらう」

ずいと迫り、銀二は強い口調で言った。

「さあ、選べ。孫に男子が生まれたからには、その子に治世を委ねるか、それとも始末役目の道を負わせるか。二つに一つじゃ」

「4-3/3」

浮浪児の集落を抜ける。それは貧民街の奥にあるので、人通りの多いところに行くには、もう少し歩かなければならない。

しばらく歩いてみると、場介は突然腕を掴まれた。

驚いて振り返る。掴んでくる手の親指を押さえて捻りながら腕を引き抜くと、地を蹴って間合いを開いた。

そこまですれ無意識にやって、ようやく場介は意識して相手の顔を見た。あつと声を上げる。

「宝治朗の兄ちゃん！」

そこにいたのは、数年前に会ったぶりの鹿代宝治朗であった。その疲れた笑みは別人かと思うほど虚ろで、かつての快活な、少年のようだったみずみずしい表情はどこにもない。

場介はよろよろと宝治朗に近づいた。

「何やってんのさ、こんなところで」

「いやね……人を探していたのさ」

「また？」

場介は笑いながらまた一歩、宝治朗に歩み寄る。

だが砂利を踏んだところで、思い出した。祖父から、今後一切宝治朗を見ることがあっても、話しかけてはならぬと言いつけられていたことを。

「場介君？」

場介の様子がおかしいことに気づいたのか、宝治朗が怪訝に声をかけてくる。その表情も、なんとなく不気味だ。場介はぶんぶんとして首を横に振ると、肩を竦めた。

「おいらとここで会ったこと、じいちゃんには秘密にしておいておくれよ」

宝治朗はきよとんとすると、すぐ笑みを深めた。

「ああ、できれば俺も、そうしてもらったほうが助かるね」

場介は古い長屋の壁際に座り込む。せつかく会えたのだ、宝治朗と話がしたかった。

「それにしても、宝治朗の兄ちゃんは今まで何をしてたんだい？」

宝治朗の所業を知らぬ場介の無邪気な問いに、青年はちくりと刺されたようなやせ我慢の笑みを浮かべた。

「言つたる……人を、探していたんだよ」

「今度は、おいらのじいちゃんじゃないよね？」

「ああ。もつと見つけやすくて、見つけにくい人さ」

意味が分からない。場介は首をひねる。

ところで、と宝治朗は話題を変えてきた。

「このあたりは、狗堂さん以外忍天狗の人は住んでいないのかい」

「え？ うん……おいらが知る限りはいないよ」

「そうか……」

場介は知らぬが、宝治朗は忍天狗の裏切り者として追われている。

あつと、場介が声を上げた。

「住んでいるのかどうかは定かじゃないけど、連絡役がいるよ。姉

ちゃんに仕事を持ってくんの、おいらは話したことねえけど」

「連絡役!？」

宝治朗は今更のように立ち上がると、周囲を見渡した。

場介の分かる範囲で、人の気配はほとんどしない。だが連絡役も

忍天狗なので、気配くらい消せるだろう。あまりあてにはならなかった。

宝治朗も同様のようで、ひどく不安げな表情で尋ねてくる。

「連絡役は……月に、どれくらい現れる？」

「おいらが知ってる限り、月に一回か二回つてところかなあ。全く現れない月もあるよ、姉ちゃんに訊いてみないと、正確なところは分かんねえや」

するとそこへ、場介の名を呼びながら子供が現れた。あの丸刈り頭は、幸男である。

「ようちゃん、こいつを忘れちゃダメだろ」

幸男は紫からの手紙を差し出した。見知らぬ大人がいることにぎよっとしたようだったが、煬介は気にせずそれを受け取る。

「うわっ、フサのやつ、抜きやがったな。ありがとよ」

「そういやよ、さつきめちやくちや背筋の曲がったおっさんを見たぜ。こーんな」

幸男は腰をくの字に曲げると、両の脛をあべこべの方向に引っ張った。

それに、宝治朗の顔色が変わる。

「そのおっさん、どこで見た？」

話しかけられると思っていなかったのか、幸男は目を丸くするが、すぐ調子を取り戻した。ここに出るは、浮浪児の強かさである。

「教えてほしけりゃ、五十銭よこしてもらおうか」

「幸男！」

「なんだい、ようちゃんと言えどここは退けねえぜ。おいらたちやこれでおまんま」

皆まで言うことなく、幸男の身体が浮き上がった。

壁に背中を叩きつけられ、幸男は顔をしかめる。宝治朗が、その胸倉を掴んで持ち上げていたのだ。

煬介は目を瞠った。

「兄ちゃん！ 何してんだよ！」

「とつとと教える。つまんねえ怪我したくないだろ」

幸男は目を白黒させていたが、宝治朗の必死さを小ばかにしたように笑うと、言った。

「へ、へ、そんなに気になることかよ。びた一文負けねえぜ」

「宝治朗の兄ちゃん、幸男を離せよ！」

宝治朗の豹変に、煬介は恐怖と驚きにおののきながらも、友達を守るのに必死だった。幸男は今度は地面にたたきつけられ、咳き込む。その身体を、宝治朗は蹴とばした。

「時間がないんだ、早く言え」

「へ……あなた、文無しかい……だつ、たら、おいらも……用は、ねえな」

幸男を踏みつける足に力がこもるのが分かる。煬介は後ずさりながら、考えるより早く、叫んでしまった。

「待ってる幸男、姉ちゃん呼んでくる！」

駆け出した煬介に、しまったという叫びが追ってくる。

転がるように駆ける地面は土だ。草履履きでは早さが出ない。ぼろぼろとはいえ靴を履いている、その足音が追いかけてくる
宝治朗だ。

「うつわあああー！」

振り返って煬介は悲鳴を上げた。はからずも幸男から宝治朗を引き離すことには成功したが、今度はこちらを追いかけてきている。それも、先よりはるかに鬼気迫る形相で。

煬介が姉と祖父に宝治朗がいることを知らせれば、今度こそ宝治朗は忍天狗に“処分”される。その一念が宝治朗を突き動かしているのだが、そんなことを知る由もない煬介には、何故宝治朗がこれほど必死に己を追うのか分からない。分からないから余計に、その恐怖が煬介を襲った。ただ、そう、恐怖　　殺されるかもしれないという、逼迫した恐怖。

無茶苦茶に叫びながら、煬介は逃げる。だが大人が子供を追い回し、捕まえ袋叩きにすることなど日常茶飯の裏通りで、その叫びに耳を寄せる者はいない。どれほどの恐怖で子供が叫ぼうと、浮浪児と思しきその子に助けを差し出す手など、ありはしない。

いくら煬介の足が速くても、大人の忍天狗はもつと速い。木に登るだけの頭の余裕も煬介にはなかった。それが、結局のところ宝治朗に捕まるという絶望を、煬介に与えた。

鬼の形相と目がかち合う。宝治朗の懐から銀色が覗く、それが剣であることなど煬介には明と知れた。

殺される。

殺される。

その一念が、さらなる恐ろしい道へ、焔介を突き飛ばす。

「うわあああああああ！」

焔介は叫びながら、宝治朗の腕を手の甲と、手首で滑らせた。

考えたものではない。恐怖、恐怖。ただそれだけが、焔介を突き動かした。焔介は知っていた、ただ一つ、その術を。

足を払う。焔介よりも何回りも大きな体は、弱い軸を払われるだけであっけなく均衡を崩した。敵の足が折れ曲がる、刀を掴んだ腕が上がる。その力に逆らわぬよう、腕のゆく方向だけを、変えてやる。

焔介を突き動かす一念が、体に叩きこまれた造作を再現する。向きを変えられた刃は持ち主に握られたまま、持ち主の首を、滑った。めり込む首筋が、みるみる紅色の粒を、流れを、飛沫を生んだ。

「あ……」

声とも息ともつかぬ吐息が唇から漏れる。肌の色が失われ、目がぐるんと上を向き、そのまま彼は仰向けに転倒していく。

倒れた身体は痙攣している。あたりの土が血を吸って、どんどん黒く染まっていった。焔介は足の力をなくして尻餅をつく。血の池から、死体から離れようと地面を蹴るが、体は後退しない。

「うわ……ああ……」

掌が血まみれだったことに気づく。鉄さびの臭いがする。頬も、髪もだ。真上から血しぶきを浴びていた焔介は、頭から真っ赤に染まっていた。

倒れた身体の痙攣が収まる。焔介は呼びかけた。

「宝治朗……兄ちゃん……」

答える声はない。全身の血を流しつくしたように真っ白な顔は、開いたままの口、目は、それを如実に示していた。

誰がそれをもたらしたか。

宝治朗に何が起こったか。

すべてを理解して、焔介は絶叫した。

「5-1/4」

結論の出ない議論は平行線をたどる。

黙り込んでしまった幹久と兎丸銀二とまる、その空白を埋めたのは、真つ赤に染まった煬介の帰宅であった。

間もなく激しい雨が降ってきた。煬介の言うとおりに幹久と銀二は家を飛び出し、町の貧民街へ足を運ぶ。奇跡的に誰の目にも止まらなかったのか、血だまりに沈む死体は間違いなく宝治朗で、二人は戦慄に息を呑んだ。

より人目のつかぬところにひそやかに運び、地中に埋める作業を行う。慣れたものだが、お互いに無言のうちで、思っている内容も同じであった。

「煬介がこれをやったのか」

穴に死体を寝かせる作業を終え、雨の中呆然とする幹久に、銀二が重い口を開いた。

「……修業を付け始めて、どれくらいですか」

「武芸事は七年、秘伝は一年ほど」

「未恐ろしい御子ですな」

目を細め、銀二は言った。

「どうなさいますか」

「どう、とは？」

「先ほどの話の続きです。もともと、始末役でなくとも忍天狗として生きるからには、こうして人を殺める機会はいくらでもありませんよ」

「……おまえさんは、余程煬介に大頭を継がせたいものと見える」

「いいえ、これは当代様のご遺志あさかけに過ぎませぬ。旦影あさかけ様に抱く危機感あさかけはわしにすら感じられますがね」

「旦影どのは何をしようとおるのじゃ？」

既に今や、忍天狗の主権は旦影の手の内にあるはずだ。宝治朗の裏切りの件に対する厳しい処遇も、裏切りに最も手痛い仕打ちを受けた若い天狗たちからは大いに受け入れられ、その支持も厚いと聞く。

「旦影様は青龍天狗を再興されんとしておられる」

「青龍を？」

青龍天狗は名目上“力”を失い追放されたことになっている。間違ではないが、本質ではない。実際のところは、幕末期、青龍は忍天狗全体の意向を裏切り、幕府側についたことが原因で先代大頭の怒りを買ひ、一族を根絶されたのが“力”が行方不明になった所以である。

それを、次々代大頭にあたる旦影が再興しようとしているのだ。ますます老臣の胸中は複雑であろう。

「旦影どのは青龍天狗を気に入ってはおらんかったらう。それが何故……」

「分からぬ。次代様の考えておられることなど、わしらには分かりようがない。しかし青龍は一度裏切りを起こした一族の癩じゃ。二度裏切らぬとは限らん。そこが当代様の不安の種じゃ」

「……しかしやはり、あの子を差し出すわけにはいかぬ」

正統な継承者として煬介が名乗りを上げたとして、あっさりと退く旦影ではないだろう。

ぎらつく銀二の目が、静かに幹久を睨んでいる。

「それも、今に解決しましょうぞ」

「何？」

「……連絡役が来られたようじゃ。わしは、これにて激しい雨に溶けるように、銀二の姿が掻き消える。

代わりに現れたのは、いつもの連絡役であった。

「鹿代をやりましたか。検めてもよろしいでしょうか？」

「好きにせい」

僅かにかかった土を掻き分け、連絡役は顔を検分する 否。

それだけではない。胴体を着物から取り出すと、彼はそこに刃物を突き立てた。

「何をしている」

「検めております」

「顔を見ればすぐ分かるであろうが。何故……」

幹久は言い淀んだ。連絡役の行動が奇を極めたからだ。

彼は死体から取り出したそれをじっくりと検分すると、元の通り仕舞い込んだ。

見ていたのは、胃である。

「……何の儀式じゃ」

「忍天狗にそんな儀はありませんよ。呑み込んでいないか、確認しただけです」

「呑み込む？」

なおも理解できない幹久に連絡役はため息をつくど、死体に土をかぶせ始めた。

「これ以上聞けば、“知らなかった”では済まなくなります、それでも構いませんか？」

「どのみち、灯里にはするはずの説明であろう」

宝治朗を葬りながら幹久が答えると、連絡役は続けた。

「当代様が賊に殺害されました」

「何……」

声をあげそうになった幹久に、連絡役は「盗み聴きされる可能性があります」と指を立てる。

「賊は当代様から天狗丸を奪い去り、逃亡中です。我々はそれが鹿代宝治朗である仮説を立てていたのですが……違ったようですね」

「天狗丸とは“力”のことか」

「ええ。あなたもご覧になったことがおありでしょう」

天狗丸とは“力”の単語が指す宝玉の名称で、通常、当代大頭が呑み込み、胃の中に入れておくものである。四つの天狗丸を、忍天狗はそうやって何百年も世代を繋いできた。その、最も大事な朱雀

天狗丸を奪われたという。

「大事ではないか。皆に通達は」

「旦那様のご意向で、しておりません」

「何故じゃ？」

「白虎や玄武、ましてや青龍に知られては事でしょう。天狗丸を失ったとなれば、朱雀を地に貶めるにも等しい」

下手をすれば一族の断絶もあり得る。青龍はそうやって、立場を追われたのだ。幹久は洪面を作る。

「賊がこのあたりに逃げたというのは、間違いないか」

「ええ。……状況から言つて賊は内部の者、つまり朱雀天狗です。

事件の前後で葉隠山周辺から姿を消したものがいないか、洗い出している最中ですから、狗堂どのもゆめゆめ油断なさらぬよう」

「分かつておる」

つまり誰が味方で敵であるか、はっきりしない状況であるということだ。

「狗堂どの、私は旦那様に鹿代のことを報告に戻ります。ご自宅でご息と待機をお願いします。灯里どのにも、この話を」

「分かった、気をつけよ。賊は相当、手練れぞ」

連絡役は深く頷くと、踵を返した。

雨の音が鳴り響いている。

煬介はずっと灯里にしがみつき、泣き続けていた。何が起こったのか、何をしてしまったのか　人を殺したのだ。そして姉と、煬介がしでかしたことの“後始末”をつけて帰ってきた祖父は、何も言わない。そのことがかえって煬介を追いこんでいた。何故二人は何も言わない？　警察に行つて、おいらが殺しましたと告げて、捕まるものではないのだろうか。

「煬介」

灯里の膝に顔を伏せている煬介に、幹久が呼びかけた。

「……宝治朗はな、忍天狗を裏切つたのじゃ」

「じいさま」

灯里が非難するように声を上げる。場介は泣き腫らした目で祖父を振り返る。その表情までは見えなかった。だが、声は淡々と続く。「宝治朗はおまえを殺そうとした。返り討ちにした、あれは不可抗力じゃ。それに、遅かれ早かれ誰かが宝治朗を殺さねばならなかった……それだけのことじゃ」

「じいさま！ そんな話、場介に」

「誰か」って、忍天狗？」

場介の問いに、幹久はこくりと頷く。

場介はここでようやく理解した。宝治朗は、場介が幹久たちを呼んでくると思っ、慌てたのだ。

しかし頭が冷静に動いたのはそこまでだった。すぐに、白くなつて動かなくなつた宝治朗の顔が脳裏に浮かび、場介は目を閉じる。灯里の膝に舞い戻ると、唸り声で、耳にこびりついた血の吹き出す音と、吐息のような末期の声を追い出そうと試みる。

「場介……」

震える弟の肩を、灯里が優しく撫でる。

場介は恐ろしかった。殺人を犯した己も、それを否定も非難もしない家族のことも。

その日の夜、いつの間にか眠ってしまった場介は、外気の寒さに当てられて目を覚ました。

眼前に立つは鬼天狗の面。怯えて身を竦める場介に、鬼天狗は刀の切っ先を向けた。

「立て」

それだけ言うと、鬼天狗は刀を構える。

「……だ……いやだ……」

ゆっくりと頭を振りながら、場介は鬼天狗と間合いを崩さないように円を描くように移動する。鬼天狗の動きにぶれはない。その刹那、刀が閃いた。

「うわあああ！」

焔介はそれを避ける。頭に浮かぶのは宝治朗を殺した瞬間、ばかり。触れてしまえば殺してしまう。避け続けるが、やがてそれも限界を迎える。

刀を捨てた鬼天狗は、焔介の足を払いこぼせると、腕を極めた姿勢で首に膝を乗せた。焔介はもがくが動かない。みるみる、頭の花が止まっていくのを感じる。

殺される。

今まで鬼天狗に恐怖を感じたことはあれ、本当に殺されると思ったことはなかった。だがこの情け容赦ない攻撃に、焔介の思考はそこにまで至る。殺される。どうして、何故。

焔介は突然閃いた。そうか、そういうことか。自分を押さえる手の指をとる。親指に触れた瞬間、その手がぱつと離れた。掴まれると思ったのだろうか、だがその瞬間同じく緩んだ首の束縛に、焔介は転がるようにして鬼天狗の身体の下から逃げ出した。咳き込みながら距離を開ける。まだ、上手くは立ち上がれない。

鬼天狗は、焔介の咳が収まるのをじっと待っていた。雨上がりの泥を頭からかぶりながら、焔介は鬼天狗を睨みつける。

殺さなければ、殺される。

焔介はこの鬼天狗が、己に何の業を教えているのかに気づいていた。人を殺す術だ。宝治朗にとっさに出た返し技も、普段の武芸ではなく鬼天狗から伝授されたものだった。そう、人を殺す術を、焔介は習っている。

「もうやだよ……」

そのことが分かった以上、こんな鍛錬を続けたくはない。

だが訴えても、鬼天狗の猛攻は収まらない。焔介が立ち上がるや否や、再び組み付かれる。焔介は苦し紛れで仮面に手を伸ばした。しかし眼突きの指を、鬼天狗は軽々と避け、逆に手を掴む。とっさに指を掴まれぬよう握り拳を作った焔介は、腕を押し込むようにね

じり、その束縛を解く。

殺さなければ殺される。それはこの鍛錬においても同様なのだ。

抵抗を諦めれば、どこかの線引きで鬼天狗は場介を殺すだろう。

鬼天狗にとって、戦わない場介は必要がないのだ。そういうことだ。

場介はまだ死にたくない。自分の中にそういった欲求があること

にも、彼は気づいていた。

死にたくなければ殺せ。

殺されるのが嫌なら、先に殺してしまえ。

そうしなければ生き残れない

それが己の宿命なのだ、場介はまだ気づかない。

「5-2/4」

翌日、煬介は気分が悪いと言って学校を休んだ。

灯里もそれに付きあって、女学校を休むことにした。煬介を独りにすることに不安があったからだ。祖父は、連絡役を探すと言って家を出て行ってしまったから。

「煬介、飯は食えよ」

昨晩も今朝も食事を摂らなかった煬介を案じる言葉だけ残して、幹久は行ってしまった。

灯里は布団の中から出てこない、煬介に呼びかける。

「よう、早く食わないと片付けちまうよ」

「いらない」

返事は返ってくるようになったが、一事が万事この調子だ。

灯里はため息をつきながら、しとしとと降る窓の外に目をやる。今日は洗濯をしようとしていたのに、これでは干せない。

これから先煬介がどうなるのか、灯里には分からなかった。昨日の銀二の話が本当なら、煬介はどちらに転んでもいばらの道を進まねばならなくなる。そして自分は女だというだけで、その荷を背負わずに済むのだ。そんな馬鹿なことはあるものか。年長者として、何より煬介の姉として、そんな理不尽を許せるわけがなかった。煬介は優しい子だ。動物を傷つけただけで涙をいっぱい溜めて、あまりに気弱なため苛められて、いつだって泣きながら灯里に助けを求めような子だ。人殺しの使命にあの子の繊細な心が耐えられるものか。

だがそれを祖父に訴えたとして、何にもならなかった。昨日の晩も煬介を連れ出し、鬼天狗の訓練をしていたのだから。灯里は必死に止めたし、いよいよ煬介に真実を話そうかとも思った。だがそれも出来なかった。灯里も忍天狗だ。戦う意志を無くした忍天狗が、ど

ういう末路を辿るか知っている。敵に殺されるか、味方に処分されるか、そのどちらかなのだ。煬介は幼いながらも宝治朗を殺し、既に忍天狗の輪に加えられている。その輪の内側にいるからこそ、殺人の罪を逃れて生きていける。輪の内側にいるからこそ、その摂理に従って生きていかなばならない。

結局、生き残るためにはより強い力を得ること以外に、方法は無いのだ。

煬介に課せられた道はそういう道だ。そこから引き戻すすべを、灯里は持たなかった。

灯里にできるのは、ただ寄り添い慰めてやること、だけ。その事実気づき、灯里は絶望していた。

町を歩きながら、幹久は不穏な空気を感じ取っていた。

雨だからか人通りは少ない。雨だからか、このむせ返るような湿気が肺を満たす。だがそれだけではない。混じり濁った鉄さびの臭い、これは血の臭いだ。

幹久は警戒を強めていた。老いこそしても、何度も死線をくぐってきたから分かる。何かが起こったのだ。そして、その何かはまだ続いている。

血の臭いが強くなる。角を曲がったところで、幹久はぎよっとした。

木造の日本家屋の軒先から垂れ落ちる、それは赤い滴だった。

まるで天井と軒に挟まれるように、人間の腕が生えていた。まだ赤い。板塀を登り、屋根の上を覗いて、幹久はそれを見つけた

死体。被っている傘を剥ぐと、見知った顔が出てきた。連絡役だ。賊に殺られたか。それにしても、時間から推測して殺されたのはほんの数刻の間だろう。もしかして、賊はまだそばにいるのかも知れない。

そう思ったとき、幹久は己を呼ぶ声に気づいた。

雨に消されそうなか細い声だったが、それは忍びのものだった。

屋根を降り路地裏に入ると、古井戸のふちに俯き加減で座っているものがあつた。

銀二だ。腹を押さえ、苦しげに脂汗を浮かべている。

「兎丸どの」

立ち寄れば足元に出血が見えた。少なくともはない。傷の具合を見ようと手を伸ばすと、遮られた。

「狗堂どの、これを」

彼が差し出したのは、黒い小さな球だった。

幹久は目を見開く。

「これは天狗丸か」

「そうじゃ……当代様に託された」

幹久ははつと顔を上げる。銀二は死に向かう顔をしていたが、嘘をついている目ではない。

「では賊というのは……」

「わしのことじゃろう……あの連絡役には可哀そうなことをした。おそらく偽りを聞かされて、わしを探しておつたのだらうな」

「しかし当代様は殺されたと」

「わしが朱雀亭を出たとき、当代様はまだ息災じゃった。そのあと殺されたのだらう……旦那様によつてな」

幹久は息を呑んだ。

旦那様はもう、そこまで至っていたのだ。

そして悟る。当代と銀二は正しかったということに。

しかし、なおのこと旦那様は場介を生かしておくと思えない。

「狗堂どの、足音が聞こえるか」

銀二の声に我を取り戻し、幹久は耳を澄ませる。

「いや……」

「わしには聞こえるぞ……連絡役が連れてきた、旦那様とその腹心じゃ。天狗丸を取り返しに、わざわざ山を下りてきたようじゃの。焦っておるようじゃ」

「兎丸どの」

「選ぶがいい、その天狗丸を旦影様にお返しするかどうか、じゃ」
言っと、銀二は古井戸に飛び降りた。

この井戸は伏雁村まで通じている。逃げるつもりなのだろう、幹久はそれを追おうとしたが、追いつかれる方が早かった。表路地から現れたのは、数人の忍天狗、そしてそれを先導する旦影だった。

「久しいの、狗堂」

「これは、次代様……」

古井戸にちらと目をやる。暗闇が広がるばかりで、銀二がどうなつたか幹久には分からない。

「話があるはずじゃ。来い」

「御意にございます」

若い忍天狗たちに連行されるように、幹久は旦影に従った。

銀二の推測通り、旦影は焦っていた。

朱雀天狗丸を銀二に託したと、当代 父である焰村千影に告げられたことこそ、最大の屈辱に他ならない。結局千影は後継ぎとして旦影を見ていなかったのだ。では結局、己のしてきたことはなんだったのか？ 恐怖政治と言われようが、旦影は父よりもよほど現実的に、今忍天狗を取り巻く社会を見てきたはずなのだ。事実、目まぐるしく変わる情勢の中、船は沈まずにいるではないか。

それなのに、当代は旦影を認めなかった。それが深く旦影の誇りを傷つけた。父を隠居に追い込みこそすれ、それ以上の暴拳に出なかつたのは、旦影なりに父を敬っていたからだ。それなのに

旦影の激情に灯った火は、瞬く間に炎と化した。怒りという名のそれは、親殺しにまで、昇華した。

そして一刻も早く朱雀天狗丸を取り戻さねば、賊に仕立て上げた何者かを千影の仇として斬り捨てねばならない。旦影が固執するのは大頭の座であった。他がどうなるかと知ったことではない、もとより、目的のためには手段を選ばぬ男だ。

そして今、町はずれの小屋に引きずり込んだ幹久に、旦影は命じた。

「洗いざらいを吐け。兎丸はどこじゃ」

人払いは済ませてある。兎丸銀二が偽りの賊であることを、外に見張りで立つ腹心たちは知らない。

一方で、幹久はやはり、老いた顔の皺を深めた。この男も父と同じだ、と旦影は思う。

「おまえたちはわしを認めまいがな、わしのやり方を批判するなら、代替案を出すくらいはすべきじゃとは思わぬか？ 下々の者と話し合え、というのは却下だがな。声の届く範囲を下げるときりがない」

「旦影どの、時代は確かに急速に変わりつつある。あなたが言う“下々の者” 力なきものが力を持つようになるのも、時間の問題じゃ。選民思想めいた思い上がりは捨てよ。いつか必ず足元を掬われるぞ」

旦影は右腕一本で幹久の胸倉を掴みあげ、投げ捨てた。既に抵抗する力もないのか、幹久は床に叩きつけられる。俄かに、この老翁がただの老人になったような気がした。

「おまえの大事な孫どもが、どうなってもいいと言うのか。御託はあとで聞いてやる、兎丸はどこじゃ。答えよ」

「兎丸どのの行方は分からぬが、まだこのあたりにおるはずじゃ…

…預かりものなら、わしが持つておるかの」

「よこせ」

幹久は大人しくそれを差し出した。黒く鈍く光る小さな球、だが、受け取った旦影は違和感に気づく。

いつか見たことがある、あの不気味さがこの玉にはない。幹久を睨み付け、旦影は声を荒げた。

「謀ったか」

「そんなはずは……」

即座に幹久は反論しようとして 何かに気づいた様子で、息を呑んだ。唇をわななかせ、声も出ぬその様子に、旦影も同じ推測

に至り、呻く。

「まさか……」

銀二は当代の遺志で天狗丸を持って、幹久に会いに来た。

幹久の養い子は旦影の亡き実兄、千晴の実子である。

「餓鬼どもか！ くそ、兎丸めが！！」

激昂する旦影に、引きつるような笑い声上がる。

幹久は、濁った目で旦影を見上げていた。

「所詮、おまえさまには鉛の球がお似合いじゃ」

乾いた笑い声が狂ったように響く。

かくしゃく
鬻鑠の鬼天狗が、遂に絶望に屈した。

耳障りだ。旦影は懐刀を抜くと、まっすぐその喉を貫いた。

幹久は抵抗らしい抵抗をせぬまま、ただ血の塊だけを吐いて床に沈む。胃の中を検めるべきか迷ったが、今の狼狽からして本物の天

狗丸を持っている可能性は低い。だとすればやはり

血の海に膝をつき、旦影は臍ほそを噛む。

手の内に、鉛の球を握りしめたまま。

「5-3/4」

灯里は手の内で脈打つ、その不気味な玉から目を離せずにいる。玄関を激しく叩いたのは、昨日現れた兎丸銀二という男で。彼は腹に大穴を開けており、灯里にこれを託すと間もなく息を引き取った。末期に、「あなたか彼がこれを継いでくだされ」と言い置いてこの宝玉がなんであるか、灯里にも分かる。

灯里の隣で呆けたように、それを凝視している煬介も同じだろう。

「姉ちゃん……じいちゃんは」

「……分かん」

何故銀二が殺されたのか、何故日暮れになっても祖父が帰ってこないのか、何故、この家の周りを忍天狗の気配が取り囲んでいるのか、灯里には分からない。

敵意を秘めた無数の気配を、同じく感じ取っているらしい煬介は怯えたように灯里にすり寄っていた。この子だけは守らねばならぬ何が起こつても。

意を決して、灯里は玉を　天狗丸を、口に運んだ。

「あつ」

煬介が声を上げると同時に、飲み下す。

途端、焼けつくような痛みが喉を襲った。

「う、ぐつ」

「姉ちゃん！」

まるで内側から、焼きごてを押し付けられているような熱さと激痛だ。頭の先まで痺れるような苦痛が灯里を襲う。のた打ち回る灯里に、耐えきれなくなった煬介が口の中に指を突っ込んできた。すぐ現れる嘔吐感、それに逆らうことなく身体は宝玉を吐き出した。

「姉ちゃん、姉ちゃん……姉ちゃん……」

煬介は泣き出すと、灯里にすがりついた。激しく息をつきながら、

灯里は起き上がることもできずに弟の泣き顔を眺めている。駄目だ、私では、駄目なのか。

どれだけ時間が過ぎただろう、灯里はぼんやりとする頭を無理矢理覚醒させる。煬介が、玉に手を伸ばしたからだ。

「駄目っ！」

ぱしっとその手を取り、天狗丸を叩き落とす。驚いたようにこちらを見た煬介を、灯里は抱き締める。

「駄目……あなたはそんなことしないでいいんだ……いいね、姉ちゃん……じいちゃんに任せるんだ、いいね」

「でも」

「大丈夫だよ。大丈夫……」

結局、灯里は天狗丸を箆笥の中に仕舞い込んでしまった。

時間も遅い。じっと見つめるような気配を気にせぬように、早々に夕餉の準備をする。不安と恐怖に押しつぶされそうな夕食は味がせず、姉弟は半分も食べきらなかった。祖父の分は残してあるが、日がとつぷり暮れても、幹久はまだ帰ってこない。

「姉ちゃん」

「ん……姉ちゃんはじいさまを待つから、煬介は寝てな」

「おいらも待つ」

「いい。寝てな」

言って、灯里は無理に寝間に煬介を押し込む。

箆笥の引き出しを開け、深呼吸をすると、玉をそのままにして玄関に出る。少しだけ引き戸を開いて、忍び言葉で呼びかけた。

「ろの九、狗堂でございます。これは一体、どういことでございますしょうっ？」

返事はすぐにあつた。

「せむしの兎丸銀二がいるはずじゃ。奴はどうした」

灯里は答えられない。亡骸は布団に包み、弟と二人がかりで土間に運んだ。会話の相手が、彼がこの家に入ったことを知っているということは、まだ出ていないことも知っているはずである。

「兎丸どのは……死にました」

「亡骸と、奴から受け取ったものをよこせ」
やはり。天狗丸のことを知っている。

灯里は顔を上げると、何も無い暗闇に凜と声を張り上げた。

「その前に狗堂は。狗堂幹久をいかなさいましたか」

「兎丸が先じゃ」

気配が増える。風が鳴り、木々が揺れる。まるで夜が撓み、怒っているかのようだ。

灯里はここで初めて不安に我を忘れた。虫の知らせが、祖父のことを思わせたのだ。

「お願いです、祖父の無事を確かめさせてください」

「ならん。わしらが待つのは、おまえたちに対する温情ぞ、何度も言わずな」

灯里は銀二の言葉を思い出した。天狗丸を渡してはならん、
けっして。渡せば二人とも殺される。

「お、お待ちください」

ぴしゃりと玄関戸を閉めると、灯里は胸を掴んだ。いつの間にか
上がっていた息を、どうにか落ち着ける。

どうする。もう一度、試すべきだろうか。あの痛みと苦しみに耐
えればいいだけの話だ。そうだ、呑み込めばいいだけなのだか
ら。

自分にそう言い聞かせながら居間に戻った灯里は、箆筒が開いて
いることに気づいて青くなった。机の傍で煬介が背中を丸めている
のが見える。寝そべる彼の口元に、既に吐き出されたあとの天狗丸
があった。

「馬鹿！」

「ね、え、ちゃん……」

苦しげに煬介が手を伸ばす。はっとして、灯里はその指先の天狗
丸を取り上げた。煬介はさらに顔を歪める。

「おいら、思っただけだよ……」

「駄目だよ、大丈夫だつて言つたる。あんたは寝てろつて
「さつきの話、聞いてた。それでさ、思い出したんだ。宝治朗の兄
ちゃんに聞いたことなんだけど」

ゆつくりと焔介は起き上がる。

身体の下敷きにされていた方の手が、鋏を握っている。

「焔介……？」

「昔はな、それ」

焔介はにこりと笑うと、右目に手を当てた。

「それ、目の代わりに使つてたつて」

鋏が、眼窩に突き立つ。

灯里は今度こそ悲鳴を上げた。

「焔介！」

灯里は必死に引き離そうと組み付くが、身体を丸め、苦悶の声を
上げながらも焔介は鋏を手放さない。畳に紅の花が点々と咲く。涙
とも血ともつかぬものが、焔介の顔を染めていく。

机に頭をぶつけ、蹴られ、居間を転がりまわりながら、灯里は焔
介から鋏を取り上げた。だが固く閉じられた右瞼はずたずたに切り
裂かれ、鋏には 灯里は大声で、顔を真っ赤にして叫んだ。つ
いに涙が溢れる。

「馬鹿野郎！ 何やつてんだおまえ！！」

「姉ちゃん……天狗丸よこしてよ」

「馬鹿……馬鹿、おめえ……」

「いいから……これでたぶん、入るよ……」

すっと尻餅をつき、灯里は堰を切ったかのように、泣き声を上
げた。両手で顔を覆う。泣くまいと思つていたのに。思つていたの
に

焔介は笑っていた。

血まみれの青い顔で。

「5・4/4」

銀二の腹から、天狗丸は発見されなかった。

旦影は、踏み入った狗堂家の居間で、寄り添いあい震える姉弟を見る。真つ赤な目で、それでもきつと旦影を睨む姉は胸に祖父の首を抱き、弟は姉の背後に隠れるようにして静かに泣いている。自分たちの家だというのに壁際で身を縮めている二人は、淡々と作業を続ける忍天狗たちの様子をただ、眺めていた。

旦影は姉弟にいいよ近づいた。姉の方がそれに気づき、顔を強張らせる。

「おまえは狗堂灯里だな。後ろにいるのは、弟か」

「……はい」

毅然と灯里は居住まいを正した。なるほど、どこかあの女に似ている。

家探しをさせているが、おそらく天狗丸は出てこないだろう。姉弟のどちらかが持っているはずだ。そして旦影にそれを渡す気もないらしい。

実のところ、旦影はこの姉弟を殺すつもりは最初からなかった。

旦影にも子はあるが女子で、旦影がもし死ねば二人のうちどちらかが後を継ぐ可能性もある。もっとも守るべきは己の治世だが、一族の存続も当然ながら旦影の目的の一つでもある。

「顔を見せい」

姉の方ではない、弟に命じた。弟は肩をぴくりとしたが、おずおずと顔を上げる。片目は包帯で覆われていた。

旦影は直感する。

「こちらだ。」

「わしが何者か、分かるか」

「いいえ……」

「焰村旦影じゃ。二十一代目忍天狗、いわばおまえたちの大頭よ」
正式に襲名したわけではないが、いずれそういうことになるのだ。
姉弟は二人とも緊張した面持ちになった。まだ、殺されるという警
戒が抜けないのだろう。旦影は重ねて告げた。

「おまえたちの祖父、幹久は規律を破った結果死んだ。おまえたち
はそんなことをするまいな？ …… 狗堂の名、始末役を継ぐのは孫
のおまえじゃ。娘よ、おまえはその人質じゃ。裏切りさえせねば、
学校にも行かせてやるし、普通の社会生活も営める」

「そんな、せめて役回りを逆にしてください！」

「ならん。どのみち、おまえの弟は人の道に戻れぬ身であろう」

幹久の孫が、鹿代宝治朗を殺めたという報告は聞いている。その
ことを指すと灯里は一瞬黙り、しかしかぶりを振る。

「いいえ、お願いです、焰村様。わたしの身はどうなっても構いま
せん、どうか弟は……」

「いやか？ なら、二人ともここで死ぬことになるぞ」

わざと見えるよう刀に手をやる。すると、灯里の前に庇うように
伸びる手があった。

弟の手であった。少年は包帯に隠れておらぬ方の目で旦影を睨み
付け、片膝をついていた 返し構えの姿勢だ。

その目を見返しながら、旦影はふつふつと、腹の底に怒りが沸き
立つのを感じた。

同じだ。やはり、この子はあれの息子なのだ。あの、憎き白子の。
旦影は少年の顔面を掴むと、乱暴に床に叩きつけた。不意打ちは
避けきれぬかつたらしい、啞然としていた灯里が悲鳴に近い声を上
げる。

「おやめください！」

旦影が手を放すと、弟はすぐ姉の後ろに隠れた。震える肩と嗚咽
の声に、旦影は嘲りの息をつく。所詮は子供か。

だがやはり、幹久は良い後継者を育てていたらしい。それが例え
ば旦影を殺すための手段のつもりだったとしたら、皮肉な結果だが。

旦影は満足して立ち上がった。なかなかいい結末だ。

旦影の足元には忍天狗が跪いている。どうやら家探しは終わったようだ。

「旦影様、天狗丸は……」

「ああ、いい。見つかったよ、ここにある」

言いながら、旦影は懐から鉛の球を取り出した。幹久が寄越した物である。よく見れば別物と分かるが、旦影はそれをひよいと呑み込んだ。

忍天狗たちから感嘆の声が上がる。姉弟は目を瞠っていた。その二人を振り返り、旦影は告げた。

「よいな、規則を守る限り、輪の中に置いてやろう。……すべてはわしの手のうちじゃ。それをゆめゆめ忘れるな」

「ようちゃん、今日も来ねえなあ」

ねぐらの外を覗き覗き、幸男は呟いた。雨が降っているせいですだれが冷たい。けして広いわけではないねぐらが、今にも浸水しそうだ。

「ふ、ふ、フサが手紙、盗ったせいじゃあねえか」

「なんだよ、あたいのせいじゃないどくれよ」

祐作の言葉に、フサがふいと素知らぬ方を向く。相変わらずの様子に、幸男はため息をついた。

幸男だって、あのおかしな男から助けてもらった礼を煬介に言いたいのだ。やっぱりようちゃんはすごいんだ、と思う。けど、あれから無事に逃げ切れたのだろうか。それだけでも、無事だということだけでも教えに来てほしい。

「ようちゃんが来たら、ちゃんと謝れよ」

「わ……分かってるよう」

さすがのフサも反省しているらしく、しゅんと肩を下げる。

幸男はもう一度すだれの外を覗いた。

「まだかな……」

雨はしとしとと、降り続けている。

「これから、あなたには見習い始末役としておつとめをしていただ
きます」

立派な板の間で向かい合うのは、姉とそう齢の変わらない青年だ。
煬介は虚ろな目で彼をじっと見返していた。その視線に、青年は
無表情のままこう返してくる。

「自己紹介をしておきましょうか。わたしは猿國夜彦さるくに、これからあ
なたの連絡役を務めます。ああ、あなたのことは粗方聞いています
ので、結構ですよ」

先代の連絡役とよく雰囲気の似た男だ。どういう間柄かを訊く気
は起こらないが。

「まず、あなたが忍天狗の意向を裏切るようなことをした場合、あ
なたの“人質”が殺されるかそれに等しい状況になります。これは
大頭次第と言つてもいい匙加減ですが、おつとめを忠実に果たして
いる限り、問題になることではないので、安心してください」

灯里とは既に引き離された。彼女がどこに連れて行かれてしまっ
たのか、煬介には分からない。

「一人前と認められるまで、他の始末役の仕事の補助に付いて下さ
い。詳しいことはまた追つて通達しますが……あ、そうそう。人質
の方はもとより、これからわたしを介さない一切の他人との手紙の
やり取りが禁止されます。今のうちに、親しい方に出しておきたい
手紙などはありますか？」

煬介は伏雁村の実家に置いてきた、紫の手紙のことを思い出した。
だが彼女の住所は幹久しか知らなかったし、そもそも今さら何を
書けと言つのだらう。さよなら、もうこれから会うことも手紙を受
け取ることもできません、くらいだらうか？

だから、煬介はかぶりを振った。灯里にだって、手紙に書く言葉
は見つからない。

夜彦は特に何も思わないようで、事務的な話に戻っていった。

「……、ではこれから、よろしくお願いします、狗堂さん」

「……はい」

夜彦に差し出された手を、煬介は握り返した。

「第一部 了」

5・1927 フォークロア・後「4/4」(後書き)

これにて一部・了です。ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

二部からが実質本編になります、近々別枠で連載予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0489t/>

忍天狗【序部・第一部】

2011年8月6日03時19分発行